



世田谷山観音寺の開山塔
昨年11月に遷化された太田賢照和尚のお墓
開祖の太田睦賢和尚と共にお眠りされている



第142号
特攻隊戦没者 彰顯霊慰 会
公益財団法人
編集人 金子敬志
発行人 石井光政
印刷所 島根印刷株式会社

目次

巻頭言	副理事長 岡部俊哉	2
第71回特攻平和観音年次法要	編集長 金子敬志	3
各地慰霊祭等報告		
憂国碑／锚地藏尊御霊祭	編集長 金子敬志	8
十三塚原特別攻撃隊慰霊祭に参列して	理事 鮎田英一	9
第九回戦歿学徒慰霊祭に参列して	評議員 及川昌彦	12
会員等投稿		
戦友と日本人に捧ぐ	裏千家十五代前家元 千玄室	13
多田野語録	会員 多田野弘	18
AWACSとは?	会員 倉形寛	21
沖縄県大宜味村寺内博中尉の慰霊祭	評議員 高松真希	25
朗読「海軍(うみ)からの手紙」	評議員 及川昌彦	26
沖縄に散ったある特操一期生の戦記	特操一期生 田淵鷹夫	27
連載 山ある記20	会員 池田康博	46
顕彰譜(8)		47
芸欄 歌俳柳の広場		
短歌・俳句・川柳		54
事務局からの報告等		
住所等の変更について		55
年会費及び寄付金の税額控除		55
寄付者等の報告		55

挿絵提供 空目OB 宇山氏

「巻頭言」

公益財団法人 特攻隊戦没者慰霊顕彰会

副理事長 岡部 俊哉



令和4年9月27日、日本武道館において営まれた「故 安倍晋三国葬儀」に参列しました。

終始厳かに執り行われ、誠に国葬儀に相応しいものでありました。その中でも菅前総理の友人代表としての心を揺さぶられる追悼の辞は、溢れる涙を抑えきれず、葬儀の場に相応しくないと認識しながらも思わず拍手をしてしまうほどで、国葬儀とともに歴史に残る辞であると思えます。

また国内外から約4千2百人が参列した国葬儀に加え、一般献花は約2万6千

人そしてデジタル献花は52万人を超えたとも伝えられております。

加えて国家として弔意を表す儀式全般にわたり、儀仗、弔砲、音楽演奏、と列等、自衛隊の部隊・隊員が重要な役割を担っていたことに、自衛官OBとして改めて誇りに感じた次第であります。

一方で国葬儀の実施の是非については、その手続き等を含めて賛否が分かれております。これ以上言及しませんが、大いに気がかりなことがあります。故安倍晋三元総理を貶める言動がまかり通っていることであり、これが国葬儀反対の手段として一部使われている日本の現状であります。更には暗殺した犯罪者のことを忘れ、否これに讃辞を呈するまがいの言論までも聞こえてきます。8年8ヶ月にわたって外交・安全保障、経済再生等、日本の舵取りをされた宰相であり、道半ばで凶弾に倒れられた日本を代表する政治家であります。政治信条の違いや仮に好悪があったとしても、かつての日本人にはその死を悼む美德があったはずですから、静かに送るくらいの心は持つて欲しかったと思えます。

そういった意味で、「公益財団法人 特攻隊戦没者慰霊顕彰会」の活動は、先の大戦の特攻隊戦没者の慰霊は元より、

英霊の顕彰を通して日本人としての心を取り戻す一助になるものと確信しております。

此の度、副理事長を拝命しました。皆様方からの御指導御鞭撻を賜りつつ、岩崎理事長の補佐を含め、誠に微力ながら会に貢献して参る所存であります。どうぞ宜しくお願い申し上げます。

公益財団法人 特攻隊戦没者慰霊顕彰会
副理事長 岡部 俊哉



第71回特攻平和観音年次法要

日時 令和4年9月23日(金)

秋分の日 14時〜14時30分

場所 世田谷山観音寺・特攻観音堂

参列者 理事等 18名

一 概要

今回の年次法要は、例年通りの開催を目指しましたが、感染状況の終息がまだ見られないため、ご遺族、ご来賓のみへのご案内としました。しかし、首都圏の感染状況が未だ高い状況でしたので、苦渋の決断で、急ではありましたが、理事等のみの齋行に変更しました。

式の開始に先立ち、230名11団体の方から寄せられたお布施を、岩崎理事長から太田恵淳住職にお渡ししました。

(1) 式次第

1 梵鐘点打

2 国歌吹奏

トランペット

堀田 和夫

願文「特攻平和観音経」

太田 恵淳

3 世田谷山観音寺住職

4 祭文奏上

特攻隊戦没者慰霊顕彰会

5 奉納献奏

トランペット

「海ゆかば」

岩崎 茂

6 焼香

堀田 和夫

7 池前祭

(解散)

(2) 祭文

住職読経

第71回特攻平和観音年次法要を齋行するにあたり、謹んで、特攻作戦で亡くなられた、在天の英霊に慰霊の言葉を申し上げます。

皆様が、祖国と同胞、愛する人達のことを想いながら散華された大東亜戦争が終結してからすでに77年が経ち、年次法要も71回目となりました。ここ2年は新型コロナウイルス感染症防止のために、縮小を余儀なくされてきました。今年こそは、御遺族、ご来賓だけでも参列を願っておりましたが、今年も感染防止のため、昨年同様の規模での催行となり、ご英霊と多くの参列ご希望の方に申し訳ない気持ちでいっぱいです。

皆様方が大東亜戦争に於いて、身命を賭して戦って下さったお陰で、日本はその後繁栄と安寧の77年を過ごし、また、アジア、アフリカ等の国々も多くが欧米から独立を勝ち取ることが出来ました。日本国民と、独立を果たした国々の多くが、皆様に感謝の誠を捧げています。また、世界の中においても、皆様が示された究極の利他の精神に感銘を受けております。

しかしながら、本年2月に国連安保理

常任理事国であるロシアが、ウクライナ侵攻を開始し、半年以上たった今も、その戦禍は止む兆しも見えません。常任理事国が国連で承認された独立国家に侵攻し、さらに核による恫喝を行うという、前代未聞の状況が発生しています。ここで、力による現状変更が可能であると認識されれば、中国、北朝鮮も、それに倣うのではと危惧されます。まさに、祖国日本のみならず、世界が未曾有の危機の中にあります。

いまこそ、皆様方が示された、国を守る気概を持ち、この国難に敢然と立ち向かわなければと思う次第です。

この精神を、身を以て示されたのが特攻隊で亡くなられた皆様であり、皆様の示されたこの精神こそ、常に国を護り、国を興す底力であると思ひ、感謝申し上げます。

私たちは、これからもご英霊の皆様が残されたこの精神と志を守り、粉骨砕身、ますます努力し、日本の発展と文化の継承に努める所存です。

どうか在天の英霊、安らかに鎮まりまస్తుともに、私共に一層のお力を賜らんとことを請ひ願う次第です。

令和4年9月23日

公益財団法人 特攻隊戦没者慰霊顕彰会

理事長 岩崎 茂



祭文奏上



お布施の贈呈



池前祭

二 寄せられた追悼文、慰霊電報

(1) 保坂世田谷区長追悼文

先の大戦から77年を迎え、元号も、昭和、平成から令和と代わり、世田谷観音の第71回目の節目となる特攻平和観音年次法要を迎えられました。これまで、世田谷観音の特攻平和観音年次法要に出席させていただいていたしましたが、本年も、新型コロナウイルス感染症の感染拡大が収まらない影響を受けて、やむをえず、寄稿させていただきました。

熾烈を極めた先の大戦において、数多くの尊い生命が失われました。可能性に溢れた未来ある青年たちが、その生命を燃やしながら出撃し、帰らぬ運命をたどった無念に思いをいたすと、私たちは昭和20年8月より77年の月日を重ねた今日においても、なお悲しみを癒すことが出来ません。

昭和26年に、睦賢和尚が独力で建立された世田谷山観音寺には、「国のため」と、故郷の家族を思いながら特攻隊員として生命を捧げた6371柱の英名が、特攻平和観音尊像に奉蔵されていると聞きしています。

改めて、かけがえのない生命を賭して帰ることのなかった特攻隊員の皆様に、衷心より哀悼の誠を捧げます。また、かけがえのない家族を失われたご遺族の皆さまにも、心よりお見舞いを申し上げます。

す。

この間、私も感染症対策の前線に立ち、区民の健康と生命を守る責任者として、国や都と連携しつつ区役所の総力をあげてきました。

世界情勢も益々厳しさを増しています。今年、2月24日のロシアのプーチン大統領によるウクライナ攻撃の開始は、すでに半年間の年月を経過しながら、双方共に多数の死者を出しています。21世紀の今日、20世紀でピリオドを打つべきだった全面的な軍事衝突と、多くの民間人が巻き添えとなって犠牲となっている事実、ロシアに強く抗議すると共に一日も早い停戦を願ってやみません。

また、北東アジアの平和と安定を揺るがしかねない事態も、懸念される状況となつていきます。私たちが今日、「戦後」という言葉を使えるのも、戦争により尊い生命を犠牲にされた皆様によつて築かれた平和の土台の上に立つものです。

8月27日、夏の終わりの日本テレビの『24時間テレビ』での特別企画で「無言館」というドラマが放映されました。窪島誠一郎さんが戦没学生の残した絵を収集して、長野県に無言館という美術館を立ち上げる実話に基づいたドラマでした。八木莉可子さん演じる女学生が、代沢のアパートでモデルとなった絵が物語の軸となります。影山拓也さん演じる戦没学

生が出征の直前まで筆を取り続けた彼女の絵が無言館に飾られ、その新聞記事が戦争から半世紀を経た元女学生の目に止まり、無言館で彼女は若い頃の自分の絵と向き合います。

窪島誠一郎さんは、作家の水上勉さんの御息で、事情があつて養子にだされてから戦災で所在不明となり、昭和52年に同じ成城の町に住んでいたことが分かり、親子の再会をはたされました。その窪島さんも80歳を迎え、無言館に集められた戦没学生の絵を、次の世代に継承していくことが課題となっています。

ドラマにふれたのも、私たちの責務として戦争を知らない世代に歴史を伝え、平和の大切さや決意を伝えることが益々重要な時に入っていることを痛感するからです。

世田谷区は、次世代に歴史の証言を確実に渡していく伝承の場として、世田谷公園の中に平和資料館をささやかながら運営しています。

改めて戦争体験者の証言を記録し、保存していく作業を若い世代と共に努力していくことを誓います。

結びに、皆様のご健勝をお祈りし、世田谷区長としての挨拶といたします。

世田谷区長 保坂 展

公益財団法人 特攻隊戦没者慰霊顕彰会
会長 藤田幸生 殿

第七十一回特攻平和観音年次法要の御齋行に当り、
遥かに大前を拝み奉ると共に
謹んで御遺族関係者各位の御健勝を御祈り申し上げます。

靖國神社 宮司 山口 建史

第七十一回特攻平和観音年次法要のご齋行にあたり、
平和の礎とられました尊い御霊に対し、謹んで哀悼
の意を表します。

また、感染予防対策の徹底にご尽力賜りました関係各
位に、心より感謝を申しあげます。

我が国の今日の平和と繁栄をもたらしたものは何で
あったのか、いま改めて思う時、世界に目を向ければ
未だに紛争が絶えず、罪のない大切な命が、失われ続
けています。時代の変化の中で苦しみや悲しみはそれ
ぞれにあれど、ご英霊の皆様は二度と私達と同じよう
な遺族を出してはならないというかたい決意を持たせ、
困難を乗り越えてゆく力を後世に残されたのだと、私
も戦没者の遺児の一人として新たに感じております。
平和の尊さ、命の大切さを後世に語り継いでいかなけ
ればなりません。

皆様方には「平和を語り継ぐ者」として、今後とも未
永くお力添えをいただければ幸いです。

結びに、ご参集の皆様方のご健勝、ご多幸を心より祈
念いたします。

一般財団法人 日本遺族会

会長 水 落 敏 栄

この度、第71回特攻平和観音
年次法要の開催にあたり、皆様方
のご尽力に敬意を表します。

国家に殉じた英霊が安らかに眠られ
ますことを、お祈り申し上げます。

小職も常に戦没者に想いを馳せ、
日々の公務に当たって参ります。

合掌



“ヒゲの隊長”こと
参議院議員

佐藤 まさひさ

憂国碑／錨地蔵尊御霊祭

編集長 金子 敬志

令和4年7月18日(祝) 山形県鶴岡市湯殿山仙人沢霊場において回天戦没者並びに大東亜戦争全戦没者の慰霊祭が斎行されました。コロナ禍の為、頭彰会からは人員派遣ができませんでしたので、献花を致しました。



ラッパ献奏

山形在住の天野優也会員から、当日の写真を頂きましたので、紹介致します。



献水(太平洋と日本海で汲み上げた海水)



頭彰会からの献花



憂国碑/錨地蔵尊

十三塚原特別攻撃隊慰霊祭に参列して

理事 鮎田 英一

令和4年8月15日(月)、鹿児島県霧島市溝辺にある「バレル・バレー・プラハ&GEN(チエコ村)」において執り行われた第24回「十三塚原特別攻撃隊慰霊祭」に参列した。

昭和19年、現在の鹿児島空港が位置する十三塚原の広大な台地に、海軍航空隊國分第2基地が整備され、昭和20年4月から、数次に亘り特攻部隊が沖縄周辺海域の敵艦船を目指して出撃していった。戦後、旧鹿児島空港は鹿児島市鴨池に開港したが、昭和47年、航空需要の拡大に伴い、國分第2基地跡に新空港が造成整備され、昭和50年には滑走路長が3千メートルに延伸、今や我が國有数の基幹空港となっている。

「バレル・バレー・プラハ&GEN」はその鹿児島空港の西側、徒歩10分ほどの近傍にある「麴と焼酎とビール」のテーマパークであり、河内源一郎商店グループにより運営されている。敷地には飛行機の掩体壕など幾つもの特攻に関わる遺構があることから、会長の山元正博氏が、特攻隊の英霊を慰霊するため、平成14年8月15日、「十三塚原特別攻撃隊慰霊感謝の碑」を建立された。以来、毎年8月15日、碑前において慰霊祭が斎行されている。

今年の慰霊祭も定刻11時に、陸上自衛

隊國分駐屯地音楽隊のCD伴奏に合わせて参列者総員による国歌斉唱から始まった。

続く神事は、加治木島津家第13代当主・精矛(くわしほこ)神社宮司・島津義秀氏が祭主となり厳肅に執り行われた。この日は朝から不安定な空模様で雨が心配されたが、神事が始まるとほぼ同時に激しい雷雨になった。

拝礼、修祓の儀、降神並びに献饌の儀、祝詞奏上、玉串拝礼、そして撤饌並びに昇神の儀がすべて滞りなく終了する頃に、雨は上がり青空が広がった。



慰霊碑前の祭壇

次に、慰霊碑脇に設置された鎮魂の鐘(鹿児島市の大雄山南泉院住職・宮下亮善氏提供)が打鐘される中、英霊に対して黙祷が捧げられた。

その後、若い世代の代表により特攻隊員の遺書が奉読された。(遺書は別記参照)霧島市溝辺中学校3年、出水乃愛(でみずのあ)さんの澄みきった声による心のこもった奉読であった。

遺書奉読



次に、新選組の近藤勇をして「薩摩の一の太刀は受けるな」と恐れさせた薩摩の秘剣「野太刀自現流」の奉納演武に移った。

社員の方々が、雨でぬかるむ神前広場において、泥しぶきを上げながら裂帛の気合とともに激しい太刀打ちを披露された。この古流剣術は千年以上の歴史をもち、東郷平八郎元帥もその一門であったと言われている。

野太刀自現流の奉納演武



最後に主催者である山元会長、自治体の長や自衛隊の部隊指揮官を含む来賓並びにご遺族の中島富士子氏（昭和20年4月28日、國分第2基地から神風特別攻撃隊第3草薙隊として出撃し沖繩近海で戦死した、第13期予備学生・永尾博海軍中尉の令妹）からのご挨拶があった。

主催者挨拶の頃から再び激しい雨に見舞われ、雷鳴が轟く中、山元会長は、「私の理解では既に第三次世界大戦は始まっており、日本及び世界は危機の中にいる。3年前に整備して一般公開している構内の特攻記念館には毎日欠かさず参拝しているが、

そこで私は英霊さんのお力を借りながら、日本が長続きするように、平和でありますようにと祈っている。英霊さんには辛かったですし、もう一回日本を建て直していきましよう、お力を貸して下さいとお願いをしている。今までのような平和な日本はもうないでしょう。我々自身、心を引き締め、これからの時代に備えなければならぬと思っています。」と、国を思う切々たる心情を語られていた。



慰霊碑前での主催者挨拶

慰霊祭終了後、会長夫人の紀子氏からは、「慰霊祭を始めてから20年間は雨に降られたことが一度もありませんでしたが、3年前に特攻隊員の遺書、遺影、遺品などをお祀りする特攻記念館を整備してからは不思議と慰霊祭の間に雨が降ります、きっと英霊さんがお喜びになっている証でしょう」とのお話を伺った。

慰霊碑の碑文には「日本国の繁栄、鹿児島空港の繁栄、そして当社の繁栄はこの基地と英霊を抜きにしては考えられません。更には第二の国難と言われる現在の日本経済の危機的状況、道徳の乱れを考え、日本国を守るために華と散った英霊の方々への感謝の気持ちを明らかにして原点に立ち返り、誰が作った平和か、誰が礎となった繁栄かを再度検証するために、この碑を建立します」との文字が刻まれている。

「ご遺族・関係者の高齢化という、どこの慰霊祭にも共通する課題はあるものの、会社と地域が一丸となって実施する、数少ない民間施設内における貴重な特攻関連慰霊祭として、本慰霊祭は今後も連綿と続いて行くであろう。」

※参考・バレル・バレー・プラハ&GEN内の「十三塚原特攻記念館」や掩体壕跡は無料で研修できる。

ホームページ： <https://praha-gen.com/>

遺書の紹介

奉読された「遺書」は、特攻隊員のたった一行の葉書と隊員の弟が書いた手紙である。

前橋誠一・海軍中尉（海兵72期、大正10年生れ）は鹿兒島県川辺町出身で、昭和20年4月6日、菊水1号作戦の発動に伴い、神風特別攻撃隊第一正統隊の操縦員として九九艦爆に搭乗し國分第2基地を出撃。沖縄北飛行場沖、敵艦船に突入戦死。

同乗偵察員は高橋元一・海軍少尉（九州医専・予備学13期、大正10年生れ、千葉県出身）

『余白の遺書』弟 松造さんの手紙より

「元気で行ってきます」

それはたった一行の別れの挨拶状であった。今でもはつきり覚えている。

昭和20年3月のある日、兄の前橋誠一から、川辺郡川辺町の故郷に一通の葉書が届いた。その葉書には、いっぱい余分を残して真ん中に一行しか文字が並んでいなかった。

当時、旧制川辺中学校1年生であった私には、その葉書を見て一瞬驚いた。いや余りにも簡単な文章だ。しかし暫くたって、これは遺書ではないかと思いが詰まった。その不吉な予感的中した。4月に入って、もうすっかり桜の花が散ってしまった頃だろうか。兄の戦死の公報が故郷で知らされた。

兄の遺書となった葉書には、もう一つの謎がある。

それは葉書の宛名が、両親や兄弟でなく叔父宛であった。どうして兄は、肉親に最後のことを直接届けなかったのだろうか。私は戦後ずっとそのことを思い続けてきたが、今でも謎は解けないままである。

ただよく考えてみると、兄は海軍兵学校出身の職業軍人である。学徒出陣の後輩たちと一緒に飛び立たなければならぬ。

父や母やそして幼き弟や妹たちの姿が目に浮かんだことだろう。そして死出の旅への別れの言葉もいっぱい語りたかったろう。

しかし職業軍人としての強い意識が肉親への情念を抑制させて、叔父宛の、たった一行の遺書を書かせたのではないかと思うようになった。

あの葉書のいっぱい残された余白は、実は肉親の弟や妹たちに語り継げなかった兄の思いがたくさん詰め込まれていたに違いない。そう思うと胸が詰まる。

兄は海軍兵学校72期生である。同期生の名簿によると、昭和20年4月6日、神風特攻第一正統隊長として第2國分基地を発進、沖縄北飛行場沖の敵艦に突入したとある。

また別の資料によると、百里原空特攻隊は、4月6日、菊水1号作戦に参加、沖縄付近の輸送船団攻撃のため、九九式爆撃機14機に分乗、午後1時30分から午後2時にかけて國分基地を発進した。小隊長として

前橋誠一中尉の名前が名簿に記載されている。

兄は少年時代、父の仕事の関係で奄美大島の名瀬で育った。旧制大島中学校から海軍兵学校に進学したのである。

沖縄に向かう途中、奄美大島の上空を飛行している。さぞ感慨深い目で島々を眺めた上で覚悟を決め、突撃したことだろう。安らかに。

（この手紙は鹿兒島空港から車で5分の霧島市上床公園内・特攻隊國分第2基地資料室に保管展示されている。）



基地を出撃する九九式艦上爆撃機
（『戦史叢書 沖縄方面海軍作戦』378頁）

第九回戦歿学徒慰霊祭に参列して

評議員 及川 昌彦

令和四年八月二十八日(日)十三時より広島護國神社にて第九回戦歿学徒慰霊祭が開催されました。

コロナ禍のため三年ぶりの開催となりました。前回は、慶應義塾大学から学徒出陣した海軍飛行予備学生14期の柳井和臣氏による講演会が開催されましたが、今回はコロナの影響で講演会はありませんでした。

三年ぶりの開催にもかかわらず石橋林太郎衆議院議員や海上自衛隊第一術科学校長、第13旅団長、呉地方総監部幕僚長等来賓14名一般44名合計58名の参列と盛況でした。慰霊祭もコロナを意識して座席の間隔を空けて君が代・海ゆかばの斉唱は奏楽のみで実施されました。顕彰会の会員でもある久保慶子実行委員長による祭文奏上を含めて粛々たる雰囲気です。神事が執り行なわれ、神事終了後、境内前にて全員で写真撮影して解散となりました。

58名の参列者中顕彰会の会員は及川・高松評議員に、岡山から藤原一雅岡山郷友会長、東京から早川文象氏・地元広島から北森茂樹氏・齋藤美香氏・掘チゾコ

氏に久保慶子実行委員長夫妻を含め9名でした。現役の自衛官の制服での参列が目立ち慰霊祭が引き締まった感じがしました。
久保慶子実行委員長は、来年は10回という節目になるので盛大に開催したいとのことでした。



久保慶子実行委員長による祭文奏上



参加者全員による集合写真

本記事は「英霊にこたえる会 たより」第66号（令和4年6月6日）に掲載された記事で、千玄室様及び英霊にこたえる会様の許可を頂いて転載するものです。

戦友と日本人に捧ぐ

|| 特攻隊の思いで ||

裏千家 十五代・前家元
英霊にこたえる会 参与 千 玄室



今の若者も頼もしい

私の周りを見ても、今の若者にとって大東亜戦争は歴史上の出来事でありその本質を知ろうとしている人は少ない。それぞれの国により教育の仕方は違うが、その国のモチベーションをしっかりと教えているのに日本はそれが出来ていない気が

がする。

私が会長を務める（公財）日本国際連合協会では、二〇一〇年から日本・中国・韓国の大学生を対象に、それぞれの国の持ち回りでユースフォーラムを開催している。二〇一九年夏に東京で第十回を開催した後、コロナ感染症の為やむなく中断しているが、対面での交流が出来るようになった暁には是非とも再開したと思っている。

始めた当初は、韓国との間で慰安婦問題が再度クローズアップされていた時期であった。中国や韓国は、国際情勢や国連に関心が高い一つの大学のクラスやゼミの学生をメンバーとして組んで来ていたが、我々は敢えてそうせず全国から応募を募り選別した学生でメンバーを決めていた。その為、英語力にしても慰安婦問題をはじめとする国際問題に関しても少々覚束ない感が否めなかった。

しかし、この十年間の間に学生達の意識が高くなって来たのには本当に驚かされている。英語力も格段に上がり互角に中国や韓国の学生と討議している様子を見ると、まだまだ日本も大丈夫だと思える。最初の頃、学生達には討議の場は勿論、食事の時などでも戦争に絡む話題が

出ないように気をつけるよう注意していたものだ。韓国などは、教育の中で自国が有利になる歴史を教え込んでいる気がしないでもない。アメリカで良く耳にするのが「原爆を落としてやったために、早く終戦を迎えられたのだから日本は感謝すべきだ」という話である。とんでも無いことだが、実際その様に理解している人のなんと多いことか。原爆による悲惨な被害を知らないのだ。広島や長崎が受けた被害を目の当たりにした時、人々は皆言葉を失い、いかに自分たちが無知であったかを知るのである。

日本は戦争に負けたからか、また特有の国民性の故か、原爆の被害者やソ連に抑留された人達は、他の国々の様に声高に何度も賠償を求める様な動きはしていない。

この頃は高校生や大学生が中心となり、戦争の実態を記憶しておこうという動きが多く出ていると聞くが、誠に頼もしい限りである。

戦争体験を語る

しかし、実態を語れる人々は確実に減っている。私の同期も、もう何人も残っていない。そもそも戦争経験者は、その

体験が悲惨であればあるほど口を閉ざして人生を送っていたであろう。私自身も長い間、戦争その中でも特に特攻の話を公にしたことは無かった。家族にさえも詳しいことを話すこともしなかった。しかしこの頃は、私が話さなくては、若くしてまだまだしたいことが沢山あった。ろうに特攻で亡くなった同期のことを誰にも知らないままになってしまふ。命ある限り伝えること、それが私の生き残った使命だと考えるようになった。

学徒出陣

私が大学に入った当時は大学の数も今のようによくはなかったが、入学と同時に徴兵猶予願いを提出すると卒業までは徴兵されずに勉学にいそしむ事が出来た。しかし二年に上がる時、戦局は悪化の一途で兵力が足りなくなり、文系の学生は懲役猶予取り消しとなった。所謂、学徒出陣である。理系の学生は戦後の事を考えそのまま大学に残ることが出来たのだが、今更理系に行くこともならず、徴兵検査を受けた。当然、健康で体格も良かったために合格し陸軍と海軍とに分けられたのだが、私は伯父が海軍軍人だったため海軍に志願し、それが通り入隊と

なった。

出陣式は京都の植物園グラウンドで雨の中行われた。

その後、舞鶴の海兵団に入団し基礎訓練を受け土浦に移った。ここで試験に次ぐ試験や適性検査でふるいにかけられるのだが、この試験が風速や風向きから進む角度を割り出す様な、所謂、理系の試験であり、理系が苦手で文系に進んだ身には本当に大変であった。皆の成績があまりに酷かったため、教官をして「本当に大学生なのか」と呆れさせた程であった。

しかしどうか試験を突破し、晴れて第十四期海軍飛行専修予備学生として徳島の基地に配属され少尉に任官した。

飛行機乗り

私は戦闘機を希望したが、身長が高い上、落下傘に座るので風防いっぱいになり、結局偵察機に廻された。靖國神社の遊就館の正面に置かれている零戦をご覧になった方も多いと思うが、あの美しい形、そしてビスがしっかりと打ち込まれて風の抵抗を受けない様になっていることにお気付きだろうか。上昇の速度は非常に早かった。しかし機体の軽量化の為、



乗員の安全は二の次であり操縦席の背面にアメリカは鉄板を入れていたのに対し零戦は軽金属しか設置されていなかった。その上、戦争の早い時期にアメリカは撃墜したほぼ完全な形の零戦を引き上げ、その性能を研究しグラマンに反映させグラマンFを作成したため、日本は本当に不利になってしまった。土浦の航空隊では洗濯も勿論自身でするのだが、名だたる空つ風で干した物が氷付く寒さには閉口した。そして寝るのはハンモックである。これを起床時、速やかに片付けなくてはならず、手こずる者も多かった。

徳島で少尉に任官してからは、従兵が付き身の廻りの世話をしてくれた。訓練は、「通常一年半かかるところを十ヶ月で身につける」と言われ厳しいものであったが、一歩間違えれば死ぬのであるからそれも当然であろう。二言目には「貴様達は、死にに來たのだ」と言われ続けたが、それだけに食事は戦時中であつたにもかかわらずましであつた。しかし家族が面会に持ってきてくれる甘味はやはり特別な物であり嬉しく、皆と分け合い食べたものだ。

また、その時の主計長が「大学半ばで來たのだから、読みたい本があつたら遠慮せず

に言いなさい」と言ってくれた。勿論、反社会的な本は駄目であつたが、読みたい本を取ってもらえた。

軍隊であるから規律正しいのは当然であり、基地での訓練であつても艦上と同じ呼び方で右舷、左舷と組分けされ「本日は右舷上陸」と言われると、その組が基地から外出出来ると言う意味であつた。起床時は「総員起床5分前」の号令がかり速やかに行動出来る心の準備をするのである。この習慣は七十七年たった今でも私の体に刻みつけられている。

訓練中は後ろに乗った教官から叱責されるのだが、操縦を茶道の点前と同様に考えるとスムーズに出来るようになり、その上、私は大学時代に水上機の操縦を習っていた為、一番に単独飛行が出来た。しかし、訓練飛行から基地に戻ると、下で見ていた教官に呼ばれ、「股、開け」で殴られるのである。

仲間

私は、煙草も酒も嗜まなかつたが、少尉になると配給があつた。それを整備兵に渡したのだが、「千少尉の機は任せて下さい」とそれは丁寧に整備してもらつた。それこそビス一本でも抜かれたら大

変なことになるのだから整備兵は大切にしておかなくてはならない。時に陸軍の戦闘機が整備不良で緊急着陸し、整備しなくてはならないことがあつた。陸軍は敵国語である英語を一切使わず全て日本語に置き換えていたが、海軍は七つの海を制覇する意気込みで英語を使い続けていたために意思疎通が大変だつたと聞いた。因みに「ズボンのポケットはゴミ箱

だと思え」と言われ、ゴミが落ちていた時は素早く拾い、ズボンのポケットに入れたものだ。これもスマートさを重んじる海軍ならではの教えであろう。また包炊所（ほうすいしょ）にも差し入れをするのとバツカンに入つた餅入りの汁粉などをくれたのも思い出に残る。このように書くとか緊迫感が無い様に感じられるかもわからぬが、常に死がそこにあるが、死を意識しないようにしていた気がする。

特攻隊の資料館が各地にある。そこにある写真を見ると、とても良い笑顔をしているものが多いのに気付かれるだろう。死ぬ事が怖くない人間はいない。誰もが怖かつたはずだが、国の為などと言うことでは無く、自分がここで死ぬことにより愛する家族が恙なく暮らせるようになるのだと信じて特攻していった。

特攻隊の現実

戦況が緊迫してきた四月、総員集合と集められ、「これから特別攻撃隊編成の希望を取る」と言われ紙を配られた。そこには、熱望・希望・否と書かれており、官姓名をを明記しなくてはいけないのだから、私は「熱望」に二重丸をつけた事は言うまでも無い。

その数日後、また総員集合がかかり「皆、特別攻撃隊の編成になった」と告げられた。それからは、更に厳しさを増した訓練が行われた。

訓練で徳島から進発し戻ってくるそこに眉山が見えてくる、「眉山、よろよろ」というのが慣例であった。「よろよろ」とは海軍で宜しく候の意味であるが、ほっとしたものであった。

沖繩攻撃の特攻は、夜間の進発になるのでその為の訓練もした。風防を墨で黒く塗り、廻りが見えない状態で計器飛行をするのである。その状態で急上昇、急降下を計器のみを頼り操縦するのは本当に覚束ない心持ちであった。

下士官でもベテランの教官からは「敵に後ろに着かれることだけは避けろ」と言われ、さらに「もう教えることは何もありません。卑怯と言われても、急上昇

するなり雲の中に入るなり、とにかく逃げて死なないように。それ以上の技量を持っていないのですから」と言われた。数年前に映画化され話題になった「永遠の零」はまさに私達のことだと思ふ。

その後、特攻進発の為、九州の鹿屋に転属した。陸軍の特攻基地の知覧は錦江湾を挟んだ向かい側に位置する。余談であるが真珠湾攻撃の折、錦江湾が真珠湾の地形に似ているため、ここで訓練を行ったことをご存じであろうか。

さて、鹿屋に着いてみると各地から集まった艦上攻撃機、艦上爆撃機をはじめとする攻撃機で一杯であり、我々は急遽作られた串良の基地へ移動せざるをえなかった。

串良は急拵えの為、何もかも不足していた。

献茶

ここでの飛行訓練後、同期と一緒に持参していた携帯用の茶箱で一服のお茶を点てた。

茶箱の携帯が許されたのも海軍だからである。陸軍では到底許されなかったと思う。この折「生きて帰ったらおまえの家の茶室でほんまもんのお茶のませてくださいよ」

と言われた。この時、背筋がすうっとなつた。本来「白菊」は偵察機として非常に有能な機であったが、これを攻撃機に改造し、両翼の下にそれぞれ二五〇キロ爆弾を装着し、信管を抜いて進発するのだから生きて帰れない。この事をはつきり事実として突き付けられた一瞬であった。

その後、次々と皆進発していった。沖繩攻撃は夜中過ぎの進発になるため、夕方命令が出されるが、雨の日は命令が出ないので皆ほっとしていた。命令が出る所持物を整理し書いておいた遺書を託すのであるが、私もかつて書いた遺書を持っていて。そして夜間、杯で酒を飲み、それを地面に叩き付け機上の人となった。残る皆が集まってくれる付近の方々と「帽振れ」と言ってこれを見送った。

本来、二人一組の進発であるが少年兵上がりの年端もいかないのと組んだ時、命令違反ではあるが強引に残して進発していった者もいた。

奄美大島を出た辺りから制空権をアメリカに握られており、海上からや空中からの攻撃が待っている。沖繩までたどり着けた機は果たしてどのくらいいたであろう。今も、慶良間列島の海中には多くの戦友が眠っている。

節目ごとに、海上自衛隊の協力を得ながら沖繩の海上で慶良間列島に向かい慰霊のお茶を献げている。一碗のお茶が海の中に沈み海面が緑に染まると、その中から亡き戦友の声が聞こえてくるのだ。

敗戦そして戦友への思い

敵艦を発見し体当たりする時には「我、敵艦発見。これより突撃す」と打電しそのまま電信機を押し続けて体当たりするのであるが、ツーンという音が途絶えた時間が最後の時となる。

出撃は家族にも伏せられていたため、出撃後に基地に訪ねて来られると、対応しても本当の事を伝えられなかった事が心に残る。

名札が外され、食事をしていた場所が次々に空いていく中、何回も嘆願したにもかかわらず、私は待機命令のまま松山の基地へと転属し、中尉として終戦、私からみれば敗戦を迎えた。

密命が出ていると言うことで蛍池の飛行場まで戻ったが、そこも敗戦処理でこたつており、取り敢えず帰宅するようにと言われ京都へ戻った。帰宅が遅れたため、家では私はどこかで戦死したであろうと思われていたらしい。

戦後の一時期は、生きて帰ってきた

ことに忸怩たる思いしか持たず、前を向くことが出来なかったのであるが、父が、やって来る米兵に、確たる態度で茶道を指導している姿を見ている内に、確かに戦争には負けたが文化では負けていないと感ずるようになり、戦後七十七年間「一盃（いちわん）からピースフルネスを」と世界を回っている。

口々に、平和と言っているがそれだけでは平和は来ない。と言うより「平和」と言う言葉を使わないで済む世の中にしていかなくてはならない。今も私の背後にいる亡き戦友の思いをしっかりと受け止め、これからもこの身が続く限り戦争というものの悲惨さをご存じない方に伝えていくことが、残された者の使命であろうと思っている。

毎年十月四日に靖國神社でお献茶を奉仕させて頂くが、いつも一碗を献げるとき爽やかな風が吹き抜けるのを感じる。

「靖國で会おう。先に行って待つているぞ」と言った仲間には、今しばらくの時間を待っていて欲しいと願う。



多田野語録

「これでいいのか」

會員 多田野 弘

連日、ロシアのウクライナ侵攻のニュースを目にする。人間の尊厳を揺るがす理不尽な事態だが、出口は見えていない。

ロシアはあくまで自説を覆さず、ウクライナ侵攻を続けている状況は、今回の表題「これでいいのか」という思いを深めている。この機会に考えを述べたい。

戦争という大問題は、誰もが考えも及ばぬことのように思っているが、争いは、国家間の争いからはじまり、隣近所や夫婦間の争いまで含まれている。故に争いについて、私たちも真剣に考える必要がある。なぜ争いは起きるのだろうか。これら争いの源は、人々が人間の本質は理性であり、理性は完全であると考えるところからきている。その結果、自分が正しいと思うことを主張し合うので、対立が深まり、争いになっていく。つまり、理性が争いをつくっているといえる。過去のいづれの戦争の発端も、正義を主張することから起こっており、その両者の正義を力に訴えて解決しようとしたことにある。現に、ロシアが武力でウクライナを侵攻したことが世界中から批難

されているのを見ても分かる。

また最近では、自由と平等という理念が浸透しており、「権利と義務」という意識が高まっている。これは合理的で当然と思えるが、権利は対立を生み、義務は強制を強いる。大切なのは、いかに正しい理念であろうと、争いをつくったのは、仏つくって魂入れずになることを知らねばならない。

それでは、平和を実現していくためには、何が大事なのだろうか。ユネスコ（国際連合教育科学文化機関）の憲章前文に、「戦争は人間の心の中から始まる。だから人間の心の中に平和の砦を築かねばならない」と宣言されている。

では、自分の心の中にどのように平和の砦を築けばよいのだろうか。まず、人間の理性は、合理的にしか考えられない不完全性をもつことを知るべきである。自分がどんなに正しいと思っても、決して完全ではないのである。次に、自分と異なる考えであっても、その中から何かを学べるかもしれないと考えられるなら、一回り大きい人間に成長していけるし、対立も起こらない。さらに、争いに勝つより大事なものがある。それは力を合わせるという、人間としての価値観をもつことである。打ち負かせて勝つことに喜

びを見出すのでは、平和はあり得ない。

最後に、人は、考えが対立すると、相手を説得して自分と同じ考え方に導こうとする。すると、説得されればされるほど、相手は対立の気持ち湧き立たせ、遂に、争いになってしまふ。価値観が多様になる今日、競争に勝つためではなく、互いの価値観を認め、支え合うことが重要になっていく。

即ち、現代社会の進歩発展には、弱肉強食でなく、適者生存の原理が求められている。状況の変化に自分をどう適応させていくか、自己創造を成し遂げた者のみが生存し得るのである。勝っているように見える会社があるが、それは競争で勝っているのではなく、状況に応じた自己創造、自己変革を徹底的に進めた結果である。

もし、競争に勝つことを目的にするならば、その手段に気を奪われ、かえって実力を発揮できなくしてしまう。競争は、自分の潜在能力を引き出し、自分を高めるために必要なものである。対立する相手の考えを知ることが、自分の至らぬ点に気づく絶好の場と考えるなら、相手はなくてはならぬ協力者となる。勝敗に拘わらず共に進歩成長できる。

故に、重要なのは勝敗ではない。共に

能力を高め合い、協力していける人間が望まれている。それは理性で考えるのではなく、心を司る魂を原理とし、理性を手段として使うべきである。このようにして心の中に平和の砦を築けるならば、私たちは争いのない平和な家庭や組織、ひいては戦争のない平和な世界を実現していけると確信する。これでいいのかと自分に問いかけて、自己を創造していきたい。

多田野語録

「覚悟を決める」

会員 多田野 弘

覚悟を決めるとは、予想される重大な事態に対して強く決心する事をいう。覚悟を決めた経験が私にも何度かある。最初は、青年期に南の戦場に向けて故国を出るときで、死の覚悟であった。ところが戦場(ラバウル)に着いてみると、その覚悟がいかに不確かなものであるかを知らされた。連日の烈しい弾雨が飛び交う中へ、躊躇してなかなか飛び込んでいけない自分がいた。覚悟して決めたことと、それを実行に移すことの間には、天地の開きがあることを知った。この体験が私の一生を貫く基になつている。

なぜ覚悟を決めたのに実行できなかつ

たのか。それは、覚悟を、アタマか肚かどこで決めたかに起因すると思う。三日坊主という言葉があるが、私たちは何か良い習慣を身につけたい、悪い習慣を止めたいと決意して取り組んでも、いつの間にか尻すぼみになる。何とかしようと自分に鞭打つが結果は元の木阿弥になつてしまうことが多い。

決意が自分のどこからでたかが、「三日坊主」になるか「やり通す」かの分かれ道となり、それを「意志が弱い、強い」といつているのではないか。アタマ「心」がつくる覚悟は弱く、「魂」がつくる覚悟は強いといえる。ところが、私たちは自分で意識できる「心」が、精神作用の凡てと思ひ込んでいて、「魂」の存在を否定してしまつている。心と魂は別ものである。

私達は「魂が常に目覚め、冴えている人」を肚の据わつた人と称している。肚が据わつている人の、なにか「やるぞ」という魂の決意は強い意志となり、「やり通す」ことが容易になる。例えば、楽しくないことは三日坊主になりやすいが、早起きを励行し、何十年も続けている人を見て、「意志の強い人だ」と感心する。しかし、本人はこれを楽しんでやつてい

やつているならば、一ヶ月も続かないに違いない。この人は早起きを「気持ちいい」と受け止めており、心地いいから長続きする。冬は辛いだろうが、それよりも気持ち良さの方がさらに上回るから続くのだ。

成功する人は、魂の存在を知っており、「熱中する」「夢中になる」「我を忘れる」という至福の快楽を体得している。成功はその姿勢のもたらした結果に過ぎない。物事に「打ち込む」のは魂の働きであり、魂のなせる業である。煎じ詰めれば、魂とは、自己支配力・克己(セルフコントロール)に他ならない。自分の我や欲望を制御する力があつて初めて可能となる。かのプラトンも「自分に克つことは、勝利の内の最大のものである」といった。

私が 自己を制御・支配できる魂の存在を感じしたのは、何度も死に直面した戦場である。自分が魂の存在であるのを知つて以来、不思議にも、それまで躊躇していた弾雨の中を、平気で動き回れるようになった。その変わりように、目を見張るような思いがした。この体験が、私の生涯の強力な自信となつている。今も覚悟は心でなく、「魂でせよ」と言い続けている。

「覚悟を決める」について、内奥から湧いてくるままを述べてきた。思えば、嘗て大戦中の3年間、南方の四戦場の最前線で戦い抜いた兵士で、現在達者でいるのは私だけだろう。我ながら「よくぞ102歳まで生きてきた、そしてよくやった」と、自分を褒めてやりたい。青年期に思いがけず、魂の存在を知り、覚悟を持って生きることが、今日の私をつくっている。何と言おうと、この素晴らしい人生を与えられたことに、満腔の感謝を捧げたい。

多田野語録

「実行するは、我にあり」

会員 多田野 弘

今回の表題「実行するは、我にあり」は、自分が決めたことを実行するのは自分しかないことを示している。前回「覚悟を決める」では、覚悟して決めたことを実行に移すまでの間には、天地の開きがあると述べた。今回は、自分が決めたことをどれだけ実行できたか、102歳を迎える私の生涯から振り返ってみたい。私が実行した中で一番大きな結果は、戦後親子3人で始めた資本金50万円の零細企業が、70数年後の現在、製品の半数以上を輸出に割く世界的企業に発展した

ことである。勿論、従業員をはじめ、関係する多くの協力があつたからこそ得られた賜物である。海軍で習得したリーダーシップと、航空機整備の知識技術を基に、改善と改革を実行し続けたのが、発展の基礎になつたと自負している。

その間、私の日常の生活をどう実行してきたかを述べたい。海軍で教わつたりリーダーシップの要諦は、「指揮官たるべきものは、一度開戦となれば、部下を死地に赴かせることもある。そのような場合、部下が欣然として死地に突入するような関係を常につくり出すことである。そのためには、指揮官は、予てから、部下の尊敬と信頼を受けるよう精神修養に努めなければならぬ」と教わつた。山本五十六元帥の「やってみせ、言つて聞かせてさせてみて、褒めてやらねば人は動かじ」の名言もある。

戦後、小なりと雖も事業の運営を任された20歳代の私は、自らの精神修養のため何を実行するべきか考へた。まず、身近なことで思いついたのは禁煙であつた。「分かっちゃいるけど、止められない」ようでは、人の上に立つ資格はないと思つた。幸いにも、予想に反して拍子抜けするほど簡単だった。ところが毎度の食事が美味しく、見る見る太つてきた。対処

するには、減食するか運動しかないと考え、アラームなしの5時起床で早朝ジョギングを決めた。起されて、日覚めるようでは、何をやっても駄目だと思つたらだ。

アラームなしの5時起床は、爽快な充実した一日を過ごすスプリングボードとなつた。これは今日まで続いている。但し、ジョギングは98歳までの53年間で、その間各地のマラソン大会にも参加した。また、毎年元日に、朝日を望みながらの寒中水泳を93歳まで49年間続けたことも誇りである。かくして次々と困難な課題に挑戦し続けている私の姿を見て、「意志が強いなあ」と驚かれたが全く違う。それは、己に克てた喜びであつて、敢えて苦難を選び、実行し続けたからこそその賜物なのである。

苦難こそが進歩の糧だと思つと、わが身を律する環境におくことが苦にならなくなり、苦即樂の別天地が生まれた。従つて、続けずにいられなくなつて次々と習慣がつかられ、習慣は期せずして人格の修養となり、それにより運命がつくりあげられたといえる。

なぜ私が、誰もが嫌がる苦難に挑戦し続けたのか。煎じ詰めると、3年間南の戦場において、何度も死に直面した中か

ら得た、魂の目覚めによる。それは、昭和 19 年 1 月、ラバウル基地であった。死が迫っている切迫した深夜、自分が魂の存在であることを直感し「喜んで前から撃たれて死のう」と、スパッと死を覚悟したことである。

それ以来驚く勿れ、飛び交う弾雨の中を臆することなく、平気で動き回れるようになった。この思いがけない心境と行動の変化は、自分の力をこえた魂の働きに相違ないと確信した。それ以来、死ぬも生きるも気にならない、生死を超越した大安心の境地と、大いなる自信を得られた。この魂の目覚めこそが、戦後の生涯を貫く敢闘精神の土台になって、克己の実行を支えてくれた。決めたことをやり通したこれまでの歩みは、「実行するは我にあり」の日々であったといえる。



A W A C S とは？

会 員 倉 形 寛

1 A W A C S とは

A W A C S (エイワックス) とは、何であろう？

航空自衛隊においては、通常ただただ限定的に E-767 を指している。

しかし、本来 A W A C S とは、全く別の意味である。Airborne Warning and Control System

… (空中) 早期警戒管制システムという意味である。そう、あくまでも一つのシステム名称であって、航空機の名称ではない。(なお、類似したものに、AEW・Airborne Early Warning

… (空中早期警戒) がある。)

2 背景

既にご存知のとおり、大東亜戦争 (太平洋戦域) において、1944 年 (昭和 19 年) の 10 月から米英の水上艦艇に対して航空機による「体当たり攻撃」が組織的に開始された。空からの特別攻撃、すなわち航空特攻である。

このフィリピンにおける海空戦での特攻は、まだまだ序の口であった。

1945 年 (昭和 20 年) 4 月 1 日に米

軍が沖縄本島に上陸し、沖縄戦が始まると、沖縄周辺海域の敵艦艇に対する特攻は激烈なものとなった。(特攻による攻撃は、3 月下旬から既に開始されている。)

これがため、米海軍は沖縄本島を取り囲む 15 か所以上に、S A レーダーと S L レーダーを装備した「ピケット艦」と呼ばれる駆逐艦または護衛駆逐艦を配置したのである。これらのピケット艦には対空支援のため 2、3 隻の駆逐艦か上陸支援艇を随伴させた。

ピケット艦はピケット・ポイントの海域で対空哨戒することにより、予め早い時期に日本の攻撃機 (特に特攻機) の接近を探知する任務を課せられた。

ピケット艦の対空レーダーのレンジは、およそ半径 150 km であった。このピケット・エリア (前方早期警戒空域) を結節させた最前線を「レーダー・ピケット・ライン」と言う。

ピケット艦は、当初の計画どおりに機能し、S A 及び S L レーダーで早期探知された日本機の情報は、直ちに通信機能の高い戦艦、空母及び沖縄本島の読谷・残波岬沖の通信支援艦に送られ、艦隊の全艦艇に警報を発することにより、万全の迎撃態勢をとることが可能となった。すなわち、予め水上艦艇の対空防御火器

を特攻機の接近方向に指向させ、艦隊防御のための迎撃戦闘機を早期に発進させることが出来たのである。

ここで、SAレーダーとSLレーダーについて極簡単に説明する。

SAレーダー…対空監視レーダーであり、駆逐艦や護衛駆逐艦、コルベット艦など小艦艇に装備された。航空機であれば、約300kmの距離まで探知できた。これを具体的に表せば、鹿児島島の知覧・鹿屋等の飛行場から沖繩の嘉手納湾まで直線距離で約660kmであり、嘉手納湾に配置されているピケット艦であれば、当該飛行場から出撃した特攻機が(もちろん実際は偽装進路を飛行するが)奄美大島上空を飛行している頃には、既にレーダー探知可能であった。

これは爆装している特攻機からすれば、沖繩まであと1時間というところであり、米軍からすれば、空母から戦闘機を発艦させ艦隊から離れた空域で迎撃が可能であった。

SLレーダー…基本的には水上監視レーダーであるが、低空域から近接する航空機を探知することが可能であった。その目的が故に30km程度の距離までしか探知できなかった。しかしながら、低空域の航空機を探知できるといふ能力は、特攻

機対処をするためには必要不可欠であった。

この、所謂「早期警戒防衛システム」により、日本の特攻機は目標の米艦隊に近接することが極めて困難となったのである。仮に米迎撃戦闘機の防衛網を突破したとしても、水上艦艇のハリネズミの様な対空防衛火器が待ち構えており、その防衛放火網をくぐり抜けて目標に体当たりすることは、正に「神業」であったと言えよう。

一方、「レーダー・ピケット・ライン」に配置されたピケット艦の損害も決して少なくはなかった。特攻機の攻撃により大損害を被ったのである。この点について、戦史研究者の間には幾つかの仮説が存在する。代表的な二つをあげよう。

一つには、特攻機がピケット艦(駆逐艦等)を大型艦と誤認して攻撃した、という説である。これは、敵のどの艦種であれば、どの高度・距離でどの程度の大さきに見えるか、という訓練を徹底的に実施していれば、或いは誤認する確率は減少するかも知れない。しかしながら、残念なことに当時はそこまでの訓練を実施する余裕はなかった。さらに、当時の米艦艇(潜水艦を含む)は、「メジャー」と呼ばれる対潜、対水上艦艇、対空の迷

彩塗粧が施されており、その幻惑効果によって、目視による目標までの距離感や目標の速力などを誤認させることが十分可能であった。

二つには、日本側が敵米海軍の新「早期警戒防衛システム(レーダー・ピケット・ライン)」とピケット艦の存在に関する情報を何らかの方法で得ており、特攻機(隊)によっては予めその攻撃目標はピケット艦とされていたのではないか、これにより一時的であったとしても敵の新「早期警戒防衛システム」を不完全ならしめ、他の特攻機(隊)の進撃・突入を可能としたのだ、という説である。この説は、当時の日本側の敵情報収集能力および分析能力がどの程度のものであったかを調査研究すれば、有力化することは可能であると思う。

3 開発

米英の艦隊は、わが日本の特攻機の攻撃により、物理的にも精神的にも大損害を被った。ピケット艦は機能したが、損害も大きかった。しかも、水上艦艇に装備のレーダーに限らず、レーダーには「レーダー水平線」問題があった。すなわち、水平線の向こうにはレーダー波が届かないのである。

艦隊、あるいは他の防御対象物から可

能な限り離れた遠距離において敵を探知したい。それでは航空機にレーダーを装備して出来るだけ高高度から搜索すれば、「レーダー水平線」までの距離は伸び、遠く離れた場所で敵を探知することが出来るのではないか。

そこで米海軍は航空機に搜索レーダーを装備する「早期警戒機」の研究に取り組み始めた。マサチューセッツ工科大学で開発した搜索レーダーを、艦載攻撃機アヴェンジャーと重爆撃機B-17Gに装備して試験を開始、1945年5月には搭乗員の訓練も始まったが、実戦運用される前に終戦となった。この航空機搭載搜索レーダーは「AN/APSS-20」と呼称され、1945年に実用化された以降、幾度かの改修を受けながら1991年まで早期警戒管制、対潜、海上監視、気象観測、ハリケーン研究等の分野で、実に半世紀に渡って第一線で活躍した実に優秀な機材である。

初期のバージョンでは低空飛行航空機は120km、艦船は370km、改修後は、空中にあるものであれば213km離れた空中に存在するものを探知する能力があり、長距離空中監視能力が高いと言えた。

艦載攻撃機アヴェンジャーはTBM-1

3Wと呼称され、操縦士の他にレーダー・オペレーター(RO)1名が搭乗した。これに対し、重爆撃機B-17G改造機はPB-1Wと呼称され、操縦士の他、レーダー・オペレーター(RO)2名、電子技術者1名、通信士2名が搭乗した。TBM-3Wは戦闘情報艦隊のCIC(戦闘情報センター)に報告、CICが航空機を指揮統制しなければならなかったが、PB-1はROと通信士が同乗しており、戦闘機を直接指揮するCICの機能が付加された。これにより、戦闘機を艦隊のCIC、あるいは地上からの誘導指揮に頼らず、全く独立した誘導・統制・指揮の運用が可能となったのである。これが後の「AWACS」に開花していくのである。

米海軍は、1950年代後半に艦載対潜哨戒機S-2の機体上部に大型レドームを装着したE-1「スカイ・トレーサー」を実用化、ベトナム戦争にも参加した。しかしながら、この機体はあくまでも艦隊防空用の早期警戒機であり、直接飛行中の戦闘機に艦隊防空戦闘の指揮管制をすることは不可能であり、また大型レーダーの冷却に問題があったため1970年代には退役している。

ベトナム戦において、軍事介入した米

軍の陸軍および海兵隊の地上部隊の作戦を、主として空から直接的に、あるいは間接的に支援する必要が生じた。これらの航空作戦を遂行する上で、最大の障害・脅威となったのが北ベトナム軍の対空ミサイルと機関砲、そしてソ連製のMIG(ミグ)戦闘機であった。ヘリコプターにより空中機動、あるいは兵員と物資の補給を受ける地上部隊を支援する航空作戦は、米海空軍の各種作戦機によって行われた。

特に、包囲された地上部隊の直接支援となると、その作戦の性格上狭い空域に攻撃機、戦闘爆撃機、それらを援護する戦闘機がひしめき合うことになり、場合によっては攻撃中、さらにその低空域に兵員・弾薬等補給ヘリコプター、負傷者救護ヘリコプターを進入させる必要があったため、効果的な地上支援の航空作戦の指揮統制と、空中衝突など作戦遂行に重大な支障を及ぼす事故を防止する方策を早急に講じる必要が生じた。早期警戒・偵察の能力を持ちながら、さらに空域を直接指揮管制できるEC-121「ウォーニング・スター」(旅客機改造でありベトナム戦争以前に開発され、既に偵察等の任務に就いていた。)が投入された。しかし、EC-121の管制能力には限

定的な点があり、指揮統制専用のC-130Eと地上の半自動式防空管制組織(SAGF)が支援し補完しなければならなかった。

ベトナム戦争はまだ継続中ではあったが、米空軍は実戦における数々の経験、用兵上の要求からE-121の後継機として、1機で早期警戒管制の任務を担うことのできる航空機を要求し、ボーイング社が開発を始めていたE-3「セントリー」を採用することとなる。これが、あまりにも有名な航空機となった米空軍のAWACS(エイワックス)である。E-3は警戒管制レーダー、搭載電子兵装(センサー)は元よりエンジンの換装により、幾度もの近代化を実施したことにより、米空軍が1977年に採用・配備して以降、現在でも第一線で活躍している。米空軍は、現在米本土オクラホマ州のティンカー空軍基地をホーム・ベースとして約30数機を保有している。その機体の特殊性が故に、原則として、統合軍が作戦を実施する際、要請に応じてその指揮下に組み込まれて運用されるという、独特なオペレーション・スタイルを持つている。

沖繩は、地政学上極めて重要な位置に

あるため、太平洋軍(統合軍)を構成する太平洋空軍の在日第5空軍の麾下、第18航空団(嘉手納基地)にE-3を常時配備している。米国にとつてもそれだけ日本を戦略的に重要視していることになると言えよう。

ちなみに、米海軍の早期警戒機E-1「スカイ・トレース」のノウハウは、その後グラマンE-2「ホーク・アイ」に受け継がれ結実することとなった。

E-2Cは、わが航空自衛隊でも13機が運用され、三沢基地をベースとした東北方面の空域のみならず、現在では沖繩・那覇基地をベースに尖閣諸島をはじめ沖繩周辺の防空に活躍している。

さて、航空自衛隊であるが、1976年のソ連空軍ベレンコ中尉亡命事件後、ミグ25の低空からの侵入を許してしまつたという防空上の欠陥を補うため、早期警戒管制機E-3の導入を検討した。しかし、当時の防衛庁は諸般の理由から早期警戒管制機の導入は不適という判断を下したため、代替機種としてE-2を導入した。が、検討は終了したわけではなく続いていたのである。およそ20年後、ようやく早期警戒機導入が決定されたが

既にE-3の生産は終了していたため、

ボーイング社は旅客機B767を早期警戒機に改造する計画を提案してきた。航空自衛隊はこの案を採用し、1998年初号機が納入された。

航空自衛隊のAWACS、E-767の誕生である。

4 まとめ

AWACS(エイワックス・Airborne Warning And Control System)空中早期警戒管制システムというものは、第2次大戦末期の沖繩における米海軍艦艇に対する日本陸海軍の航空特攻が無ければ誕生しなかった、ということである。

もちろん、英本土航空決戦(バトル・オブ・ブリテン)において英空軍が史上、世界で初めて防空用の警戒管制システムを実運用した事実も特筆に値する。

しかしながら、この警戒管制システムを「空中で運用する」という概念は、やはり太平洋洋における日米の激烈な戦い、すなわち日本陸海軍の特攻機対米海軍の水上艦艇および要撃戦闘機の戦いにおいて生まれたものに他ならぬことを、敢えて強調しておく。

沖縄県大宜味村
寺内博中尉の慰霊祭「慰霊と絆への感謝
の日」について

評議員 高松真希

航空特攻で散華された方のご遺体が見つかるとは珍しいが、菊水1号作戦で沖繩に突撃し亡くなつた寺内博中尉のご遺体が、沖縄県大宜味村の海岸に打ち上げられ、村の方が埋葬して、今でも慰霊祭を斎行していることが分かったので報告する。

一 慰霊祭を知った経緯

令和4年3月に私用で沖繩に行った際に立ち寄らせて頂いた「対馬丸記念館」の方から、大宜味村で特攻隊員の慰霊祭をしたという記事を以前に新聞で読んだことがあるという情報を頂いた。

その後インターネットを使い調べたところ当時の新聞記事を見つけ、2017年に前述の慰霊祭が斎行されたことが分かったが、それが一時的なのか、定期的に行われているかまでの確認には至らなかった。

しかし、大宜味村喜如嘉には今でも寺内博中尉のお墓が存在することは確認できた。

二 お墓の確認

その後、それ以上の情報が得られなかったことから、令和4年4月に大宜味村喜

如嘉に直接行き、お墓を探した。

喜如嘉の大宜味村農村環境改善センター敷地内にて寺内博中尉のお墓と歌碑(寺内博中尉の実妹であり歌人の浅野綾子氏が詠んだ歌が刻まれている)を見つけ、お参りをさせて頂いた後、地元の方を探して話を伺ったところ、慰霊祭については毎年斎行していると教えて頂いた。

詳しいことは、喜如嘉の区長に聞くことを勧められたので、区長にお会いするため公民館に向かった。

三 区長から伺った慰霊祭の概要

大宜味村喜如嘉の稲福区長にお会いし、寺内博中尉のご遺体を村民が発見してから、激しい戦火のなかで手厚く埋葬するまでの顛末や、慰霊祭の様子について伺うことができた。

慰霊祭の名称は「慰霊と絆への感謝の日」。

これは寺内博中尉への慰霊と、戦後に遺品を届けてから今日まで交流を続けている寺内博中尉のご親族へのお気持ちを表したものである。

毎年、日には定めず4月(寺内博中尉が散華されたのが4月6日なのでその前後9)、大宜味村農村環境改善センターにある墓前で斎行される。

式順は
・黙祷

・区長挨拶

・献杯

・参列者より一言

・懇親会

なお、懇親会ではこの土地で伝承されている踊り「ウスンデーク」を舞うそうだ。

また、平和学習で喜如嘉の子供達も集まることも伺った。

コロナ禍になり規模はかなり縮小されたが、それでも区長を中心に毎年慰霊を続けておられる。

四 表敬訪問

令和4年6月10日(金)、石井専務理事兼事務局長と共に大宜味村喜如嘉の公民館に伺い、稲福区長を表敬訪問した。

その後、稲福区長と共に寺内博中尉のお墓に移動し、慰霊をさせて頂いた。

沖繩は長引く梅雨のさなかだったが、慰霊の間だけは雨が止んだ。

五 謝辞

4月の訪問の際は突然伺ったにも関わらず、ご自身が収集され纏められた寺内博中尉に関する貴重な資料を見せてくださったり、継続しようと尽力されている「慰霊と絆への感謝の日」についてや、大宜味村の歴史的なことまで細部に渡り分かりやすくご教授くださった大宜味村喜如嘉の稲福区長に、尊敬と共に感謝を申し上げます。

本稿は会報51号及び52号に掲載された
記事の再掲です。

沖繩に散ったある特操一期生の戦記

特操 一期生

田淵 鷹夫

誠第二十六戦隊 昭和20年5月17日
慶良間東方

稲葉 久光殿

今野 静殿

白石 忠夫殿

辻 俊作殿

合掌

あの苛烈な大戦末期にペンを操縦桿にかえて奮闘し祖国のために散華された数多い同期生のためにも、吾等の闘いのあとは埋没されてはならないと思います。学鷲の先輩として特操一期の後輩四機を沖繩上空まで誘導し夕闇迫る慶良間湾上の米艦船に見事突入を成功させた、飛行第二十六戦隊付坂本隆茂中尉がいた。

坂本中尉が、この特攻攻撃のすべてを詳細に記録された「沖繩特攻」の一文ほど私の心を打ったものはありません。読むうちに、万感胸に迫り、涙に文字がかすむのも度々でした。同期の四名の凄絶なまでの戦いを知り、そこに真の学鷲、特操一期生の姿を見た思いがしました。

坂本さんは復員後、あらゆる手づるを求めて四名のご遺族を探し当て、それぞれのご遺族を訪問し、見事な最期を伝えるとともに墓前に額づかれたの事です。編集委員会と坂本さんのご厚意によりこの一文を掲載していただく事になりました。心から感謝致します。

なお、散華された戦友は次の四名です。

坂本隆茂氏は神戸商業大学在学中は学生航空連盟に所属され、昭和16年12月繰上げ卒業、第7期操縦候補生として軍籍に入り飛行第二十六戦隊に所属しニューギニア、フィリピンを転戦、台湾花蓮港において終戦を迎えられました。

沖繩特攻

坂本隆茂

あわれ 出立

「只今より、坂本編隊沖繩攻撃に出発、目標、慶良間列島の敵艦船群、突入時刻19時30分、終り」

特攻隊員四名と私は、二列に並んで申告するや否や一斉に敬礼を行った。

最後の挨拶である

「うん。しつかり頼む」部隊長の声は短かった。

傍らには参謀が、感慨深く見つめている。

部隊全員のまなざしが、すべて私達にそそがれているのを頼に感じた。

とうとう来る所迄来てしまった。

もう何もかも、どうすることも出来ない。私達は行くのみである。

昭和20年5月17日、午後四時。

台湾の東海岸、花蓮港飛行場のお粗末な戦闘指揮所の前である。

ジリジリと灼けつくような南方特有の日射しが照りつけ、風はそよともしない。湯呑茶碗が我々の手に渡された。

参謀が持参した司令官心づくしの清酒は、部隊長の手で注がれた。乾盃。「御成功を祈る」

誰の口からか。ぼつりと洩れた。成功？成功？私は胸がしめつけられた。

こんな惨酷な門出があるうか。何とときびしい戦の世界か。

往く者、送る者、それぞれ割り切れぬ思いを胸に秘めている。

部隊長、参謀等、次々と手を握り締めてくれる。だが、もう何の感慨も湧かない。

私は体ばかりでなく心までが、唯機械的に動いているに過ぎないようだ。

抵抗しようもない怒濤にもまれながら、どこかへ押し流されている。そういう状態であった

考えるゆとりもない。心の救いを求める努力も湧かない。

いよいよどたん場に來たと思う放心に

支配されていた。

やがて飛行場は轟々たるエンジンの爆音につつまれ始めた。

離陸前に行く試運転の音。整備員が今や心をこめて調整をしてくれている。ふと我にかえた。

任務完了迄は何か無事飛んでくれと心に念ずる。元々我々飛行第二十六戦隊は軽爆撃機の専門部隊、殊に降下爆撃はお家芸であった。

大東亜戦争の勃発と同時に、満州の白城子で編成され、緒戦以来南方に進攻して作戦に従事して来た。

当初はノモンハン時代の97式軽爆をいまだ使われ、とても米軍とまともに太刀打ちできるしろものではなかったが、比島の治安作戦等には結構役に立った。

その後、ソロモン、ニューギニア方面に転進する頃、漸く99式軽爆撃機に変えてもらったものの、その時は既に戦場の制空権は、完全に米軍に掌握されて、このような飛行機では手も足も出なくなつて、部隊は消耗してしまつた。最後はとうとう戦闘機をあてがわれた。一式戦闘機「隼」である。

開戦以来の激しい消耗戦で日本の戦闘機操縦者はまたたく間に激減した。

窮余の一策として我々のような専門外の部隊に「隼」を与えて、泥縄式訓練が

行われた。

パレンバンで英国機動部隊を撃退した迄はよかつたが、比島のレイテで二度目の全滅をくらつた。

昭和19年12月。レイテ生き残りは内地で戦力回復を命ぜられ、我々は明野で新部隊長を迎え、兵員と飛行機の補充してもらつた。

三か月の速成訓練で部隊主力はシンガポールへ発つていった。

私はまだ整備の終らない数機とともに、ゆつくり後続して来いと命じられたのも、新婚間もない私への部隊長の思いやりであつたらう。

私達後続部隊が出発したのは、桜もほころびる3月の終りであつた。

明野から宮崎に飛んで着陸してみると、そこには参謀が待ちうけ緊急命令を与えた。

沖繩の戦況が逼迫している。

南方に行く飛行機は全部無条件で台湾に行つて、第四航空軍の傘下に入れ、沖繩を通つては危い。

お前は上海経由で台湾に赴き、数日前に出発した中隊長と合流すべしと云うのである。

正直な所嫌な気がした。シンガポールにゆけば、まだ余命はあろうと思つていたが、台湾とあらば沖繩攻撃である。最

後は特攻に繰り出されるであろう。もう

このころは戦争をやっている我々にも、戦局がすでに終の段階に來ていることが、ひしひしと身にしみていた。

ペン捨てて

予感半分当たつて半分はずれた。

なぜなら二カ月後の今、私は特攻隊員と一緒に沖繩に向かつて離陸しようとしている。

私自身に与えられた任務は。特攻四機を沖繩まで誘導し、かつ戦果を確認して帰還すべしである。体当たりせよとの命令ではないから特攻隊員とは申せない。だがこの頃の誘導機は九分九厘帰還して

いなかった。

特別攻撃隊というものは、必ず護衛の戦闘機に護られて進攻し、体当たりを確認してもらうのが常道である。

沖繩作戦の初期の頃は、相次いで多数の特攻を進発させ。護衛戦闘機が上空を援護していったが、米軍の物量には如何ともし難く、護衛部隊の大半は常に帰つて来なかつた。

我が方の戦力は急速に低下し、援護など、ゼいたくことを言つておられない程息切れがして来た。

全くの丸腰で決死でなく必死であつた。

今、私と共に出発しようとしている稲葉、今野、白石、辻は、いずれも師範学

校を途中で放棄して軍籍に身を置かせられた、特別操縦見習士官出身の可愛い少尉ばかり、充分の訓練も受けていないが、早くより特攻要員として修業させられて来た。

かげながら随分悩んでいるらしい様子もあつたけれど、今や私ごとき及びもつかぬ明鏡止水の境地にあると見受けた。国を思う一途の赤心には全く頭が下がる思いがした。

五名のうち割切れないのは私だけであつた。

技量未熟の彼等は、飛び上がるのがやつとのこと、長距離飛行など思いもよらない、途中で私を失えば、目標一つない海上で進むことも帰ることも困難である。私のようなものでも、信頼してついて来てくれるのだ。

心の中で手を合わせて拝んだ。

ガソリンは片道だけ

もし戦の世に奇跡があれば、私は生還できるのだ。

唯、それを希うにはあまりにも状況はきびしかった。目標の上空で被弾することがあれば、勿論私も体当たりを敢行する位の覚悟はあつた。

否、その他に途はなかつたからだ。

だが、此の場合は特攻四機の戦果を誰が確認してくれるのか。そして私自身の

体当たりすら誰も認めてくれないであるう。

愈々飛行機に搭乗しなければならぬ時間が迫つて来た。直立した四人の瞳が私の指示を待っている。

私は彼らの前に立つた。そしてじつと見つめた。緊張した顔ではあつたが、誰も恐怖を表わしていない。

若いながら何と立派な、と思いつつ私はこの世で与える最後の言葉に苦慮した。

作戦の打合せは既に済んでいる。此の期に及んで何を言わなければならぬのか、離陸した後は信頼し合う魂があるだけではないか。

それでも私は格好をつけるため、ぐつと唾のみこんで一息で言ってしまった。「絶対の俺を信じてついて来てくれ、それだけだ。終り」

「はいっ」

四人は一斉に答えてくれた。

私は彼等の一人一人とゆっくり力強く手を握りあつた。

出動命令を受けて以来、朝から機械的に動いていた気持ちも、この時初めて別離の悲壮が実感として湧いてきて、ぐつと胸につまつた。

私は落下傘をつけていたし、海上に不時着したとき浮くことの出来る救命胴衣まで施されていたが、彼等はそのような

ものは、全く受けつけなかつた。

その代わり飛行帽の下には日の丸を染めぬいた鉢巻をしていた。

私は帰りの機上でしたためる夜食まで準備してもらっていたが、彼等は私と一緒に宿屋で食べた早めの夕食が最後であつた。

特攻機にはもちろん爆弾が吊りさげている。

あの軽い戦闘機に、よくも二五〇キロ爆弾を左右の翼に下げたものだと思つた。……

その爆弾は機体から離れるようにはしてなかつた。

人も機体も爆弾も一体となつて突入するのだ。

ただ、突入する直前に、座席にある針金を引いて、弾の先端の安全装置を外しさえすれば、突入の瞬間炸裂する仕組になつていた。

ガソリンは満載しても三時間程度、隼としては沖繩までが精一杯であつた。

更にまた特攻機には、無線機もなければ機関砲まで取りはずされて全くの丸腰であつた。

敵の哨戒機に遭遇すれば万事休す、無念であるが致し方ないことであつた。

そればかりではない。特攻機の翼や胴体により完全に塗りつぶされてあつた。国

籍不明機である。

戦時国際法上からこれが許されるどうかは私は知らない。

目標突入前に米軍哨戒機群の餌食にならないよう考えたものかと思うが、軍首脳部の自棄的な作戦と思われてなさげなかつた。

つまずきのランプ・アウト

誘導機である私の機体には、爆弾代わりに魚雷型の増加タンクを取り付けた。二〇〇リットル入り二本。ドラムカン2個分である。

これだけ燃料を増やして台湾・沖縄往復がどうやら可能であつた。

この燃料を使い果たせば、用のすんだタンクはスピードの邪魔になるばかり、スイッチを押して海中に捨て去られる運命にあつた。

私の機には無線機を搭載した。戦果確認報告のためのものである。

会話は禁ぜられ、不得手なモールズでやらねばならぬ。そこで対空無線班と打ち合わせて簡単な符号をきめてお茶を濁すことにした。

もしまた、私が自爆せねばならぬ時は、この無線機が。私の最後を基地に知らせてくれる一縷の望みではあるが、その頃に無線機能は極度に低下して、とても期

待はもてぬしろものであつた。

試運転を終えた飛行場はもとの暑い静けさに戻つた。飛行機はわれわれの乗り組むのを待っていた。

出発を決意した。

「まわせ！」飛行機の方へ力一杯となりながら、右手を大きく円を画いて合図した。

五機一斉に始動。

われわれは始動車に飛乗り、見送りの人々に手をふりながらそれぞれの愛機のもとにかけつけた。

「異常なし」機付長は報告した。

「御苦労」愛機「ちくご」の操縦席に飛びこんだ私の眼と手足は、いつもの習慣通り機械的に点検をはじめていた。

エンジンの全力回転を終り、増加タンクのガソリンに切換えた途端、異常を発生した。

燃圧計がドロップするではないか。

一大事である。これでは片道飛行しか出来ない。

「おーい、駄目だ。一寸来てくれ」

機付長を呼んだ。機付長はプロペラの風をまともに受付けながら翼を這い上がった。

「吸い上げが悪い。危い、何とかしてくれ。時間がないから急いでたのむ」

彼は座席にもぐり込んで、あれこれ苦心している、どうも芳しくない様子。時間は刻々と経過する。

ジリジリしてきた。

特攻機の方はそろそろ準備完了して、

私の方を向いて合図を待っている。

沖縄突入時刻は正確に19時30分たるべしと定められてあつた。

この時刻は、攻撃の成否に関係が深かつた。

夕闇正に迫らんとする薄暮、突入する空からは艦船が見えて、敵からはこちらが見えないという理由からであつた。

米軍のリーダーがどんなに精巧なものかは、終戦後判つたことだが。

離陸が遅れるならば、日が暮れて目標が見えなくなってしまう。この重大時期に、出発からつまずきとは何としたことか。

興奮と焦りが交錯して来たが、逆に意を決して日ごろの愛機を見捨てることにした。

「予備機をまわせ」私の声は上ずってしまつた。

機付長ら整備員はこまねずみの如く動き出した。

テイク・オフ

おんぼろ予備機が掩体より引き出され、

燃料補給、無線機の積み直し、すべての系統の急速点検である。

最早一刻の猶予も許されぬ。

少々の不備は目をつぶって飛んでゆく。

こうなれば帰還はいよいよ望むべくもない。

しびれを切らした特攻機は、車輪止めを外して動きかかっている。

まだ座席にも上がっていない私は、手を振って各機出発点へ行って待機するよう命じた。

爆弾をぶら下げて、如何にも重々しい四機は、ゴツゴツした感じで地上滑走を始めて、滑走路の北端へと向かって動いていった。

いよいよがまんできなくなった私は、機付長をせきたてて操縦席に飛び乗った。全力試運転もそこに片付けた。

指揮官機がおくられて出発点に向う恥ずかしさはどうしようもなかった。車輪止めを外せの合図をするや否や、私は急速度で飛行場をつつ走り、四機の待ち受けている出発線に飛びこんで、グイとブレーキを踏んで指揮位置についた。一〇分遅れた。

出発早々から黒星、私の心は重かった。然しこのどたん場であわてては、失敗の上塗りをやる惧れがある。

二度、三度大きく深呼吸をした。後ろに左右を見やれば、二機ずつが斜め後方に整列してじつと見つめている。

もうお互いに話すことが出来ない。これからは顔を見ながら手で合図するだけである。

発着係の赤旗がサツと白旗にかわった。「出発」

手を上げて左右を振りかえった。彼等も直ちに手をあげて私に応答した。

フラップ半開、エンジン全速。花蓮港飛行場の青草が矢のように彼方に流れ出して機体は真南の方へばく進した。

容易に浮かばない。燃料が重いからだ。いつもの倍近く滑走して漸く浮いた。

重い危険物をかかえた訓練不足の彼等が、無事離陸出来るかどうか、かなり困難である。

編隊離陸をやめて、空中集合に、時間はかかるが単機離陸にしたのも安全を考へてのことであった。

今迄に特攻機離陸時の事故を何回となく聞かされていたからだ。

無事浮いてくれ、心に念じながら上昇しつつ彼方を振りかえった。

二番機がすぐ後に続いている。三番機も浮いた。海岸寄りに旋回しながら集合しやすいように速度を落とした。最後の

機が浮いて、一時に力の抜けるのを感じた。編隊を組み終ってゆっくり旋回。

機首をめぐるせば一点の雲もなく、海はあくまで紺青である。汗が次第に引いていった。

今迄の焦りと暑さがうそのように。次第に冷静になってきた。

いつもの訓練のような錯覚に襲われた。特攻機はびたりとついてきて、見事な編隊ぶりである。見下ろせば海岸にくつきり花蓮港飛行場。

われわれは高度五〇〇メートルで一度その真上を南から北に抜けながら翼を振って地上の見送りに最後のあいさつを送った。

地上からは盛んに白い布が振られている。立派な編隊が頼もしかった。

然しあまり長時間の編隊に精神を集中するのは余り、彼等が疲れて、いざというとき頑張りがきかなくなることとを懼れて、飛行場が見えなくなつてから、もう少し離れると合図してにっこり笑つてみせた。

今までの緊張がほぐれたらしい表情が彼等から見てとれた。

有無をいわせぬ

飛行帽の下のレシーバーからは、対空無線の雑音がジージーと間断なく流れてくる。

うるさくて仕方がない。

突入する以前に私からの発信は、特攻機の行動を米軍にさとられぬよう、如何なることがあっても禁じられていた。唯、地上からの連絡を聞くだけである。

私はレシーバーをもぎ取って、地上から何を言われようと聞いてやらぬと決意した。自らをわざとつんぼにして全精力を、誘導と体当たり集中することにしたのだ。左は寝々たる新高山系である。

沖合一キロ辺りを、海岸線に沿って一路北へ北へと高度をあげて進んだ。沖繩は台湾のほぼ東に当たるのに何故北に向かうのか。ギリギリの燃料なのに何故回り道をするのか。それには理由があった。米軍の航空母艦群が、台湾東方海上に接近しているらしいとの情報入手していたからである。

沖繩へ直行する途中で、敵の哨戒機に引つかかれば一たまりもない。参謀からも、一旦台湾の北端に出て、それから沖繩に向かうよう注意されていたのである。私が参謀から受けた戦闘指揮要領は、他に幾つもあった。

その日の朝、突然、部隊は台北の師団司令部より、特攻四機の出撃命令を受けた。間もなく、軍参謀が作戦指導のため台北から飛んで来た。かねてより期する

所はあったものの、まさかこの日に誘導の命令を受けようとは思っていなかった。私は、途端に泡をくつた。

特攻隊員は平素から身も心も準備が出来ている。私だけがあわてて出動の準備をする始末であった。

ばたばた用意をしながら、結婚したばかりの妻のおもかげがふつと頭をかすめて、靖国神社がいやでも浮かんで来た。

参謀に私の気持など判ろうはずはない。戦争を通じて、一番嫌いな人種は、敵

よりも味方の参謀であった。操縦桿を握ったこともない、地上より転科してきた参謀が、どうして飛行機乗りの気持を理解してくれよう。軍の参謀は到着するや否や、びしびしとそして事務的に、私の心の抵抗をおかまいなく指導していった。

○沖繩の戦況は日に不利である。地上軍は次第に南方に追いつめられ、最早や全滅は時間の問題である。といって航空軍としてもこのまま見捨てるわけにもゆかぬ。死闘の続く限り友軍の士気を鼓舞すること及び敵の戦力を少しでも消耗させなければならぬ。

○米軍の台湾上陸の公算大なる昨今、それに備えて台湾所在の飛行機を温存したい。さりとて沖繩攻撃を放棄しない以上、少数機による特別攻撃を敢行す

ることになった。

○本日の攻撃目標 慶良間列島の敵艦船攻撃時刻19時30分

○護衛戦闘機はつけない。敵戦闘機と遭遇した場合は空中衝突せよ。

○突入前に無線の発信を封じる。

○石垣島西方より高度ゼロ、即ち海上スレスレに接近せよ。

○不時着場は石垣島のみ。此処の地上部隊には本日の作戦は連絡済み。夜間不時着の場合は翼灯を点滅せよ。

○誘導機自爆せんとするときは、連続長音を発信しつつ突入せよ。

○本日の夜は月齢一。即ち闇夜である。帰還の場合は台湾の山にぶつけるつもりで帰ってこい。

ざっとこのような具合である。航続距離の短い戦闘機では、昼間でさえ台湾、沖繩の片道飛行がいいところである。

往路は海上スレスレで神経を消耗し、帰途は闇夜の盲飛行、連続六時間、自信も何もあつたものではなかった。

過去三年間、第一線で随分ひどい戦闘を経て来たが、こんな無茶な命令はなかった。

シヨート・カット

高度は一五〇〇メートルを指した。こ

の辺が手頃だろう。

編隊は上昇をやめて機首を水平にした。あとは巡航速度で単調な然しながら緊迫した前進である。

私は宿題を解決しなければならぬ。出発の際に遅れた一〇分をどう切りつめるか。速度を増せば事は簡単だが燃料の消耗に無駄が生じて航続距離が問題となる。近道するより外はないのではないか。地上からの無線は聞いていないし、飛び上がったしまえば参謀がどう命令しようとかつちのものだ。

指示されていた台湾北端からの変針を止めて、ずっと早めに宜蘭の沖合で方向転換をやろう。機動部隊と遭遇したら、全員海中に突っ込むまでだ。

隊員一同、こんな私のたくらみを知るよしもない。

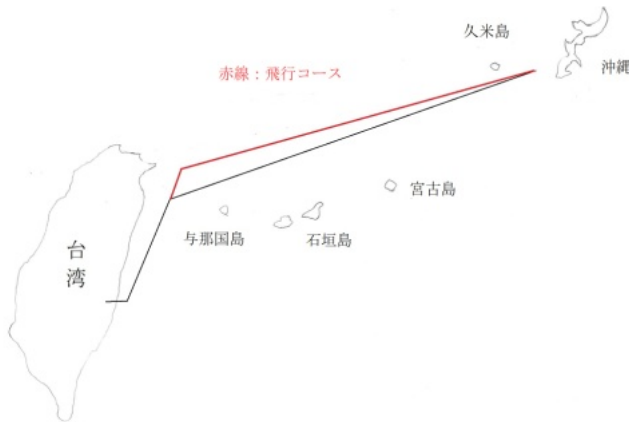
唯、私を信頼し切って飛び続けている。われわれ特攻隊の轟々たるエンジンのひびきは、東台湾の海面上空に漲っていた。海上は気流が静かで殆ど揺れない。身体には絶えずリズムカルな震動が伝って心強い。私唯一人天地の間にじっと浮かんで静寂の真只中にある錯覚さえおぼえる。

今日の目的がこんなつらい任務でなければ、どんなにか快哉を叫びたくなるよ

うな空の旅であろう。出発の興奮が醒めて、急に眠気を催した。

特攻機は、私を一心に凝視して編隊を崩すまいと努力しているのに、航路の近道を断固決意してから、私は何も考えたくなかった。

今からあれこれ取越苦労しても仕方がないではないか。とにかく自分で決断し



た通りに飛んでゆこう。今の私にとって、取りあえず燃料節約の処置をとることである。

徐々に高空レバーを開いて混合ガスを薄めはじめると、予期していたとはいえず、気筒温度計の指針は見る見る上昇してきだが、この際、エンジンの加熱も止むを得ない。極度にまでガソリンの消費を節約することにした。

左に黒々とそびえる断崖は、われわれと併行して果てしなく続いてゆく。

台湾の高嶺が東海岸までセリ出して来て、そのまま崖となって海に落ち込んでいくのだから、海辺に猫の額の平地すらあり得ない。

南北を通ずる唯一本の交通路は、海上数百メートルの断崖の中腹を羊腸の如く見えかくれに這いまわっている。不便極まる東台湾が文化と隔絶していたのも、もつともなことである。

見おさめ？風景

長い断崖が後ろに去って宜蘭の青々とした平野が眼下に展開し蘇澳の港には小さな機帆船が二、三隻浮かんでいるのが望見された。

四番機が少し離れているのに気がついた。

調子が悪いのかな、今なら基地へ単機

返すことも出来る。様子を訊ねてみよう。速度を落として手を振ってたずねたが、大丈夫という合図をうけた。そして彼はしきりに宜蘭の街を感慨深げに見下ろしていた。

さあ、この辺から変針するのだ・・・いよいよ台湾に背を向けねばならぬ。私は旋回する前になって初めて彼等に予定を変更して、ここから方向を変える旨を伝えた。

彼等は私の一〇分間切りつめの意図が判らなかつたかもしれない。だが、この地点より東へ向かうことだけは了解してくれた。

特攻機よ、今のうちだ。娑婆の景色をよく眺めておいてくれ・・・静かに、おもむろに、編隊は旋回を開始した。

私の羅針盤はゆっくり回転して、沖縄の方を示すとピタリと止った。前方は唯、渺々たる海と空の連なりである。

ここから沖繩まで二時間半、何の目印とてなく、コンパスを唯一の頼りとしてゆくのだ。

機首を東に向けてからは、前途に横たわる幾つかの大きな不安が次第に鉛のように私に押しかぶさって来た。まず、敵の機動部隊に捕捉されれば、天運と思つてあきらめる外はない。

それはさることながら、気懸りなのは、全機がこのまま好調で飛び続けてくれるかどうかであった。

一旦飛び上がってしまったら、特攻機の調子がどうであろうと、私にはどうにも出来ないことだった。

一機でも不調になればどうするか。

特攻機の引返しが可能距離であれば、単機帰還を命ずることも出来るし、あるいは再挙を期して全機引返すことも出来る。

だが、航程も半分以上過ぎた場合は、事故機は目をつぶって見捨てる他はなかつた。

戦争も末期頃の飛行機は、その粗悪ぶりがたつたや生命を託して死闘するにはあまりにも程遠いしろものが多かった。過去の数年の激戦に耐えぬいて来た私にもこのころの飛行機には、内心ビクビクしながら乗っていたものだ。

まして重装備の爆弾搭載にふらふらしながら飛んでいるこの若鷲達の飛行機は、すぐ近くにありながら、向うを眺めるだけで、直接手の届きようがないだけに不安やるかたないものがあつた。

それよりもっと大きな心配があつた。

これこそは私の全責任であるが、未だかつて経験したことのない飛行方法で目的地

へ進攻することであつた。

それは、米軍の電波探知機に捕えられないために、海上二時間近く超低空飛行で行けという命令である。このような飛行は常識では到底考えられない冒険であつた。完全軍装で一里の道程を匍匐前進しろというようものであつた。

戦闘機には自動操縦装置などというぜいたくなものはない。瞬時といえども手足を解放することの許されない原始的な操縦機構であつた。

また、超低空ともなれば、ぐつと視野が狭くなつて恐らくは突入少し前に、沖繩の陸地が視野に入ってくる程度である。

わずかでも方向が狂えば沖繩からはずれたまま飛びすぎてしまつて、特攻機を犬死させねばならない。

島影一つない海上を、コンパスの目盛りをずらさずに飛ぶ極度の注意集中力が要求される。全く緊張そのままの二時間でなければならぬ。

それを敢えて遂行しうる体力、気力が我にあるか。これらの不安が重なり合つて、私の気持は次第に重苦しくなつて来た。

九死に一生

台湾に背を向けた時から、私は直ちに

風向風速を観測して針路修正角度を決定する作業に専念した。飛行機は風の全量流されるといふ大原則がある。

二時間以上の横風を受ければ、目的地とはずいぶん離れた方向にいつてしまう。そのために風向風速を測定し針路を修正して飛ばねばならぬ。

高度を高く飛行している今のうちから観測しておかなければ、超低空になつてからは測量不能である。

海上のこととて、私は海面の白い波頭を凝視しつつ、慎重に幾度も納得のゆくまで、くり返し測定した。

沖縄までこの方位を維持していかねばならぬ大事な根源である。

特攻機は正しく編隊を組んで、調子は悪くなさそうである。あと二時間と少々を四つの生命が、私を取り巻いているのだ。つい先程、四番機が宜蘭の街を見つめていた姿を憶い出した。

最期のちやめつ氣

ふと我に返つて四番機をのぞいた。

ああ、今日彼は神になる。彼は満足しているかもしれない。それでいいのか、いや誤りであろうか、私には到底解けぬ人生観である。

さあれ、ふるさとに、我が子の無事を祈る母なる人に思いを馳せて、胸がしめ

つけられて来た。

彼の視線がピタリと合うと、こつくりうなずいた。

私も激励をこめて、二度、三度強く頭をふつてやった。

何を考えているのだろうか。もの云えぬ悲しさ、お互いの意志は僅か十数メートルの空間をすれ違つてゐるのだ。

南方はるか水平線近くに灰色にかすんで見えるのは与那国島であろう。

台湾をふり返ればまだ山のいただきが連なつて水平線上に長々とうかんでいた。

あと二〇分もすればいよいよ超低空飛行にうつるのだ。

二番機の辻が何か座席でござござやつてゐる。何か異常があるのかな。

いつも理知的な青白い表情はそれ程変わつていないようだから、別に気にするほどの事もあるまいが、普段からともすれば思いつめてゐるような気配の感じられた彼のことだ。安心はならない。

座席のポケットに手をいれてゐるようだ。何かとりだして、もそもそやりはじめた。

少々気懸りになり出したが突然その正体が分かつた、大きなバナナをむいていたのだつた。

私の方へ二度、三度見せびらかすと、

さも美味しそうにもぐもぐやり出した。食料の積み込みとは恐れ入つたが、きつと戦友の餞けであろう。

「おい一本よこせ」と手を出してふざけた私に、白い歯をみせて、

「ここまでおいで」をやつて見せた。

それにしても何と心にくい振舞だろう。おや、全機が次々にやり出した。彼等はきつと申し合わせていたにちがいない。

編隊長の私だけが指をくわえてゐるではないか。

うつとうしかつた私の心が、この小さな事件のおかげで余程明るくなつた。

彼等の片手がお留守になつてゐる間は、編隊の体形も間延びしたり、いびつになつたりしていたが、やがて満足したらしく、再びもとの態勢にもどつた。

再びもとの態勢にもどつた。

せんりつの巨岩

さあ高度を下げる時刻がやつて来た。エンジンを絞らず機首を下げ、徐々に降下することにした。高度計の針はゆつくり回転をはじめ、速度はぐんぐん増加して機体が少しずつ震動しだした。

海面に白い波が見えるのはかなり荒れている証拠である。一〇〇〇メートル、八〇〇メートル、五〇〇メートル、連続して編隊降下がつづいて、大きな波のうねりが次第にクローズ・アップしてくる。

気流も悪くなつて時折機体が大きくガクンと震動するようになった。

高度二〇〇メートルを切る頃、突如異様な形相をした大きな岩が左前方より接近してきた。

もう陸地は、沖縄まで絶対の見えないと観念していただけに、無用とばかりしまつていた航空地図をあわてて取出してよく見れば、なるほど小さな点が印刷してある。直径一〇〇メートル、高さ五〇メートルはあろうかピラミッドの如く海面にそそり立って、鋭くとがった幾つかのピークが奇怪な趣をていしている。

平地はおろか、草一本もないが、汀には飛行機の破片がいたるところに散乱している。

ああ、これが噂に聞いていたラレイ岩か。

攻撃の帰途、傷ついた友軍機が藁をもつかむ気持ちで時折ここに不時着し、誰にも知られぬまま何人ともなく餓死したらしい。

鬼気迫るこの岩も瞬く間に後方に飛び去った。もう石垣島も遙か南方に過ぎた筈だ。

編隊はいよいよ海面スレスレまで降下してしまつた。

To be or Not to be

今日出発前、私が彼らと作戦を打ち合わせた際に、特に超低空飛行時の指示を厳守するようにくれぐれも要求していた。それは、「海面超低空は高度感に錯覚を起し易く、機体を海面にぶつつける危険が甚だ多い。

誘導機である俺は、高度五メートルを基準として飛行する。各機は絶対に誘導機より下がってはいけない。

もし俺より低く飛んだ瞬間、おだぶつになるぞ。」

これだけは彼らに守ってもらいたかつたのである。

私の機体は波頭をかすめて飛んでいる。スピード感が強烈で目がくらみそうだ。僅かでも気分のゆるみが出れば万事おわりである。

高度と方向に維持に全神経を緊張させていくうちにそろそろ敵哨戒機の警戒空域に進入してきて、上空索敵までやらねばならぬ破目となつた。

頭を動かして索敵などをやっていたとしても超低空は維持できない。又、こんな低い位置で敵と遭遇しても、戦闘どころかそれ迄だ。無謀かもしれないが、私は思い切つて索敵はやめることにした。

アメリカのレーダーが、果たして参謀の注文通りキャッチ出来ないのだろうか、

然し案外そうなのかもしれない。

敵機に補足されても逃げかくれる雲一つない快晴であるからには、せめてレーダーから逃げるために命じられた通り超低空に全精力を集中した方がまだましかもしれないのだ。

機体は気流にあおられて大きくゆれている、ヒヤリとして機首を立て直す。波しぶきが何回となく風防ガラスに飛散してくる。特攻機は私の注文通り少々高めを飛んでいるから先ず心配はあるまい。

特攻機の航続距離から考えて、台湾引き返し可能ギリギリの時刻が迫つて来た。

私がこのまま回れ右をすれば、彼らは生きて還れるのだ。エンジン不調などと事故理由はつけようと思えば何とでもつけられる。私一人が責任を負えばいい。

いっそのこと、ここから還ろうか、この若い命は救われる。そして私迄も……

彼等は特攻要員の命令を受けて以来、連日内心の苦闘を経て来て一日一日が死より苦しい試練であつた筈だ。

今引き返せば又苦悩をつづけさせることになる。このまま死なせた方が生への悩みを少なくしてやる思いやりというものではなからうか。いや生命は尊い。如何なることがあつても生命はかりそめにも奪うべきものではない。

帰るが是か、進むが是か。私の心は錯乱した。あれこれ思案しているうちに、とうとう運命の時刻は去ってしまった。いや、まだ近くの石垣島不時着場へは引き返せる。

彼等には着陸困難な飛行機であっても胴体着陸を命ずればよい。安全装置さえはずれなければ爆弾は炸裂しない筈だ。命令に背いて彼らの生命を救うかどうかの決心を行う時間はまだ残っている。緊張又緊張の連続、私の体力も気力も可成り消耗して来たことに気付いた。まだ二時間しか飛んでいないのに、腰の筋肉がおかしくなってきた。身動きの出来ないきゆうくつな座席では、背伸び一つ出来ない。頭迄が少しかすんで来たようだ。

あと一時間航程の自信がぐらつき出して、目標を目前として参つてしまう予感に襲われた。

石垣島に引返したい誘惑が頭を拾げて来る毎に、これを打ち消し乍ら、心はふらふらになって飛び続けてゆくのであった。

私の心の闘いは、彼等には勿論判らう筈はなかった。愈々迫ってくる突入にのみ専念しているのである。時間は一刻と過ぎ去っていく。

ホゾを固めて

遂に最後の生還可能の限界時間に達したが、まだ私の心は狂っていた。思い切つて彼等の一人一人の顔から何かを読みとるつもりで、風防ガラスをあげてふり返つた。

そこから眺められた光景は、私の苦惱は一度にとばした。

彼等は申し合わせたように、一斉に風防ガラスをあげつばなしにして、飛行帽をぬいでいるではないか。

額にキリツとした日の丸の鉢巻姿である。三番機の稲葉は二〇になっただろうか。

赤いほつぺをして愛くるしい、桃太郎そっくり。一同決意が漲っている。

判つたよ。君達やってくれるのか。そうか、私だけがびくびくしていたのだ。背中をドンと叩かれたようなショックを受けた。私自身が助かりたいばかりに迷っていたのだ。

よろしい。私も決心がついた。行こう。いや、引っぱっていくよ。

出発前の宿舎で最後の食事を一緒にしたことが思い出された。料理番が精魂こめてこしらえてくれた御馳走は、長いこと口にしたことのない握り寿司であった。彼等はおいしそうにパクついた。

食事をしながら私の心を看破したらしく、彼等は言ってくれた。

「僕等は突っ込むだけです、貴方は大変ですね。生きて長い道中を還らねばならんですから、お察しします。くれぐれも自重して下さい。」

死にゆく人から逆に慰められた私は、返す言葉が知らなかった。

太陽は西に傾いて、快晴の空も漸く一面の夕焼けに照り映えた。とうとうここ迄哨戒機に食いつかれなかったのは、何と僥倖だったことか。大体此の辺で今迄の特攻機の大半はやられてしまっているが、前上方の空を見渡したところ、全然哨戒している気配がない。

或いはこのまま発見されずにゆけるのはあるまいか。まだ、レーダーには捕捉されていないらしい。

超低空一時間半、もう体はくたくたになつてしまつて、ただ手足だけが機械的に操縦している。日は水平線に没し、空はまだ明るさを残しているが海は次第に紺青の濃度を増して来た。海面よりの高さの判定が次第に困難になりつつある。

羅針盤だけでも二時間も飛んだ。あと三〇分で沖繩の筈だが、水平線上まだ何も見えない。果たして針路は誤っていないかつたろうか。

僅かに方向のズレがあつても、カラカラになりかけている特攻隊の燃料では、目標迄導くことが出来なくなる。まだか。まだ見えぬか。

焦燥と不安。自分の針路に対し自信を失いかけたが、今から方向を変えてもはじまらない。次第に暮れゆく空に追っかけながら、目を皿のようにして前方を凝視した。体力も気力も限度に来てしまつた。

Good bye!

どれだけ時間が経つたろうか。疲れきつた眼にぼんやりと、暮れゆく大海原のはるか彼方に、どうやら島影らしきものを認めた。

もうこの時の私の意識は錯乱の一手手前であつた。

私の航法は誤つていなかったのだ。

ぐんぐん近づく島は左前方に大きく浮かび上がってくる。これぞ久米島だ。四国の屋島台地とそっくりの形をしている。特攻隊員の表情が引き締まってきた。

久米島の稍々右手に慶良間列島が散見される筈だが、夕暮れのため視界が狭小となつてはつきりしない。

上空に哨戒機なしと見た。

彼等もよくぞここ迄無事に来てくれた。鉢巻の日の丸が鮮やかに見え、襟に巻いた白いマフラーがはたはたとゆれている。



久米島を真下に見て、突入一五分前と判断した。

空の明るさは幸いにも特攻にお詠え向きの薄暮となつて、彼等は今やおそしと私の攻撃命令を待ち受けている。疲労困憊の極にあつた私の体はいつのまにかに生まれ変わったように緊張していた。今や一刻の猶予も許されない。

愈々攻撃開始だ。

特攻隊員は連日練習して来た突入方法

を実行するのみ、彼等はきつと立派な体当たりを敢行してくれるにちがいない。

「安全装置はずせ」私の信号で全機一斉に座席の引金を引いた。真鍮の破片がハラハラと落ちて黒い海面に消えた。爆弾は今や起爆状態である。

「さようなら」「さようなら」

彼等の一人一人と手を振り合つて、最後の別れを惜しんだ。

「攻撃！」

躊躇なく最後の命令を発して私は急激に機体を前後左右に振つた。各機一斉に私から離脱した。

間隔五〇〇メートル、一列横隊に展開して、彼等はエンジン全力回転にあげながら、ぐんぐん沖繩目指して高度を上げて突進した。

慶良間列島は夕闇に浮んで、その背後に地上軍死闘の地、沖繩本島が横たわつて視界に入つて来た。

遂に目的地到着！目指す敵艦船や如何にと目をこらす。いるわ。いるわ。幾百隻とも知れない艦隊船団が、黒いゴマを撒いたように浮かんでいた。

ぐつと体が引き締まつて二、三度身震いした。

すさまじい砲火

時、正に19時30分。既に予定していた突入時刻となつた。既に予定していた

沖繩上空は次第に暗さを増して、戦果確認のためには一分一秒を争う時間である。今や予定に遅れること数分にして、激しい攻防戦が展開されんとしているのだ。

私から離脱した特攻機四機は、五〇〇メートルの間隔に開いて、真一文字の横隊で全力上昇してゆく。少なくとも一〇〇メートルの高度から急降下しなければ、所望の突入スピードが得られないからだ。彼等は今やガソリンの最後の一滴まで使い果たしているにちがいない。

私は特攻機のほぼ中央一〇〇〇メートル後方から追隨していった。次第に高度を上げる。黒ゴマの如く眺められたアメリカ艦船群は、漸次拡大し、豆粒程になってその全貌を露呈してきた。戦場上空は敵機の哨戒さえ見えず、不気味な沈黙である。まさか、われわれが超低空で忍びよるとは、予期していなかったのかも知れない。敵側の油断かとすれば今頃、われわれの機影を認めて、急速戦闘配備の大わらわのことだろう。ここまで無疵で進攻出来たことは大成功であった。

私も戦闘準備だ。真下に吊り下げてある落下タンクのガソリンが空になった。燃料コックを翼内タンクに切替え、落下タンクを捨てるため落下スイッチを押す。しまった。落ちない。翼の下は目視出来

ないが、座席のランプが青にならん以上は、くつついてはいるはずである。こんな凶体の大きなものをぶら下げては、とても身軽な空中戦は出来ぬではないか。この期に及んでこんな不手際をひき起こす！ おんぼろ予備機に乗ってきたあたりだ。

次は機関砲の試射をやる、ド……連続十数発威勢よく空中にぶつ放す。曳光弾がきれいな尾をひいて消えていった。一刻。目標は接近して来る。あと四キロメートル。まだ敵の照空灯が斉射しない。アメリカ軍の対空砲火の凄まじさは、すでにニューギニア、フィリッピンの戦闘で経験済みである。身の毛もよだつような、物すごい弾幕を覚悟せねばならぬのだ。

目前の四機は高度をとり終わって水平飛行に移った。

暮れゆく海面に、灰色をして浮ぶ艦船の数々、よくもこれだけの物量があったものだ。空母は見あたらぬが戦艦、巡洋艦をはじめ大小無数の艦船が慶良間列島と沖繩の間の海上にひしめき合っている様は誠に壯観。これを攻撃するのは、わずか四機、悲壮という外はない。あと三キロメートル。嵐の前の一瞬である。

ああ、無情

突如、戦闘の火ぶたは切って落とされ

た。前方の四機の周囲は猛烈なる対空砲火の弾幕に包まれてしまった。赤、青、紫色あらゆる色の炸裂が、小さな機体をたちまちにして取り巻く。数百の船舶の何千の火砲からたつた四機に対して、必死に打ち上げる防衛砲火である。瞬間見とれてしまった。とにかく物凄いの……一語に尽きる。

今までの戦場ではとてもこんなひどい砲火には、お目にかからなかった。私の体験では、照空灯の光芒の中でドカドカ射たれたものだが、ここでは照空灯なしで、射ちまくってくる。それにしても一カ所に集中する御手並みは、実に見事である。

あまりの華麗さに目がくらんで、小さな特攻機の機体は見えなくなった。薄暗い大空の四カ所に、大きな花火の集団が浮かんでいるようであった。

早く突入せねば、このまま撃墜されてしまふぞ、やきもきするこちらの気持ちも無頓着の如く彼等は所望の距離まで接近しようとしてか、悠々直進しているらしい。それは、対空砲火の花火集団が同じ高さで移動していくので、それと知れた。

早く早く、心で励ましている途端、ドカドカドカーン、私の機体は大揺れに震動して、あたり一面は大きな炸裂につつ

まれてしまった。目もあけられぬまぶしさである。バンバンと音を立てて被弾の破片が、機体にはね返ってゆく。一瞬私は急降下と急反転をつづけさまにうって弾幕離脱を試みていた。それ以上接近しては、すぐ叩き落されそうな予感がした。数秒の後機体の周囲はもとの暗さにもどって、離脱は成功していた。折角の高度が落ちてしまった。

急旋回して再び沖繩上空を眺めると！
しまった。

花火のかたまりが、三つしかない！右から二番目が欠けている！申し訳ないことをした。

この一機の最後を確認せず、無駄死にさせた。取り返しのかぬ悔恨の念にしみつけられる。

チラと時計を見た。19時35分。

残りの三機はまだ水平飛行の模様。目をあざむく火花が空中の三カ所に集中している。

ここまで健在であるのは、よくよくの奇蹟という外ない。

私は、敵の射程ストレスを飛びながら、ハラハラして見守るのみ。

もう突入せねば、全部やられると思った瞬間・・・一機が火だるまとなった。左から二番目である。大きな火焰が落ちてゆく。まもなく空中分解して黒い海面

に吸い込まれるように消えていった。残るは二機のみ。

二つの対空砲火は、依然として一〇〇〇メートル上空で炸裂をつづけていたが、やがて下方に移動を始めたと思うと、次第に速度を増して、海面に近づいてゆく。あッ。二機とも突入だ！暗くなつて機体は見えないが、必死に打ち上げる砲火がその所在を示してくれた。息を殺して海面を注視、もう戦艦か、巡洋艦かの判別は困難となった。

一秒。一秒。いよいよ海面。

如何。一艦の舷側に大爆発！

相次いで他の一艦に！やった、やった。

見事にやってのけた。

その閃光は紫がかっていたが、この大きな炸裂も瞬間に消えた。期待した火炎は起こさなかったが、相当な被害であることは間違いない。

孤独の帰還

立派な突入りぶりである。

沖繩上空からあらゆる光が消えてもとの静寂に戻った。戦艦か巡洋艦か轟沈か大破か。この距離ではとても判らない。確認するために思い切つて接近することにした。

二隻ともかなり大型の艦種であることは、漸く識別されたが、敵に与えた損害の程度が判らない。舷側に命中している

ならばもう沈みかけているはずだ。もう一押しを進入だ。

とたんにグワーンと一斉射撃につつまれ、爆風で機体は木の葉のよう揺れ、ミシミシと翼がきしむ。

急速反転して漸く弾幕から離脱、やれやれと機体を眺め廻したが、幸いにもまた被害はなく、エンジンも回転している。いよいよ真暗で判然としないが、このまま帰つては英霊に相済まぬ

帰還のガソリンが心細くなつたが、もう一度高度を上げて突入しよう。これが最後の突入と決めた。

こんどは異なつた方向から高速度で接近していったがすかさず目もくらむ閃光につつまれてしまった。もう少しの辛抱だ、頑張つてみたがやはりいけない。退き時だと直感して涙を呑んで離脱した。とにかくこの物量には完全にカブトをぬぐほかなかつた。突撃すること三度。命中しないのは奇蹟であつたらう。

とつぷりと暮れた沖繩上空に、私はただ一人と残された。

完全に戦果を確認し得なかつたことを英霊に詫び、その冥福を祈りながら、割り切れぬ気持ちの後ろに機首を西に向けた。

言いしれぬ孤独感がひしひしと迫ってきた。

たかいは終った。だが私は帰還せねばならぬ。これから三時間の暗夜航路は考えただけでもいい気持ではない。

さて無線封鎖も解除された。戦果報告をやる。花蓮港基地での対空無線班は、全身これを耳として、私からの発信されるピッピを待っているにちがいない。どうせこんな無線機では届かぬとは思いついて、レシーバーを耳にはめてみたが雑音ばかりで頭が痛くなる。すぐに取り外した。発信だけにしよう。

まず自身の暗号「ち・く・ご」をくり返し打って誘導機の存在を知らせた。次に戦果はどう報告するか。艦種、隻数、損害を要求されていたが、残念ながら私は艦種も損害も確認していない。仕方がない。とにかく「中型艦二隻」と発信してお茶をにごすことにした。

先方が聞いているかどうか、さっぱり頼りない。数回反復しているうちに馬鹿らしくなって止めてしまった。(基地ではこの無線をキャッチして大喜びであったそうである。)

スロ敵機

沖繩を背にして五分もするともう島かげは視界から消えて、あたり一面の闇が忍びよってきた。落下タンクの落ちない

事故がうかび心をゆすった。スピードの邪魔だ。帰還のガソリンが余分に要る。思い出してスイッチを押すが、どうしても落ちない。とうとうあきらめた。

座席に灯を入れる。計器がきれいに照明されて幾分落ち着きを与えてくれた。まだ敵機の哨戒圏内だから油断はできぬ。電探射撃をする米機と暗夜の空中戦など御免蒙りたい。とにかく一刻も早く戦場から遠ざかることだ。

ピュツ、ピュツと火箭が機体をかすめられた。来たな、やつぱり敵機に攻撃をかけた。ふり向いても暗くて敵機が見えぬ。またまた曳光が飛んできた。一体敵は何機だろう。なんとかしてこの射弾から離脱せねばやられる。失速しそうな急旋回を連続して離脱を試みる。それでも身近く光が流れる。今度は力一杯方向舵をふんでサイドスリップで射弾をそらす。相手が見えないので射つに射たれない。知っているだけの秘術をつくしてぐるぐる舞い狂う。いよいよこれでおしまいだ。それにしても機体にはカチンとも命中しない。少々おかしいと気づくと火は前方から飛んでくる。ハテナ。機関砲の曳光らしくない。(落ちつけ)機首をたてなおしてよく観察することにした。判った。何のことはない。自分のエンジンの排気管か

ら、火の粉が飛び出ししているではないか。明るい間は気がつかなかったが、暗くなつてから目に映じたものだ。平常は使用せぬ予備機の排気管についたカーボンが、灼熱されて飛び出ているのだ。とたんに吹き出した。沖繩上空で相手なしに、りきみかえってぐるぐる回りに戦闘していたわけだ。安心するより馬鹿らしさに腹が立った。使ったガソリンが惜しい。

月齢一、闇夜である。戦闘機の長距離海上航法にとつては何も見えない最も苦手な夜である。然し私には運がついていた。

快晴である。星夜は真の闇とはならず、幾分でも視界がきくのだ。目が慣れるにしたがつて、一〇キロメートル程度の島影位は、判定できそうだった。エンジンはまだ好調である。高度を二五〇〇メートルにあげた。戦場を離れて三〇分。もう敵機も追いかけてこないだろう。興奮した心も漸く平静にもどった。

帰還もコンパスが頼りだが、第一の目標宮古島さえつかめばあとは西へ西へと、石垣島、与那国島と飛石伝いに飛べる。そうすればいやでも大きな台湾にぶつかるだろう。大胆に飛ぶ他はないのだ。異様な光の存在が気になり出した。翼燈そっくりである。鋭くとぎすまされた戦場の神経は、往々にして星の光を敵機と

錯覚した例が少なくない。私もニューギニアで幾度かこれに悩まされた。先ほど、てんでこ舞いの一人相撲を演じたことと思ひあわせて今度はあわてないことにした。でも見れば見るほど翼燈そっくりである。エエイ星にしてしまえ。私は上空を見ないことにした。思ひ出したように頼りない無線を発信して気をまぎらわした。次第にねむくなってくる。

あれから一時間を経過した、下は黒々とした海また海である。気流はよくてビクとも動揺しない。一度にどつと疲れが出た。体の筋肉も関節も痛みだしてじつとしていられない。それより一番恐ろしい睡魔に襲われはじめた。いやでも睨が重くなってくる。いつの間にかうつらうつらして、はっと気を取りなおす。機体は傾き、方向もでたらめになっている。頭をたたく、膝をつねる、この戦いの苦痛は格別だ。

頭の中が次第に濁ってきた。異様な音！そして震動！どこか遠くから呼びもどされたように、ふと我にかえった。何か異常発生！かすんだ眼でぼんやり計器盤を見ればどれもでたらめだ。次第に正気になって驚いた。飛行機は横倒しになって海面めがけて急降下している。高度はあと五〇メートル、危険速度を突破している。危ない！思わず叫んだ。急速に操

縦桿を引きあげれば機体はバラバラに分解する。三〇〇メートル、二〇〇メートル、高度は下がる。海上一五〇メートルで危うく機首が立直った。あと数秒遅かったら……冷汗がスーッと脇の下を流れた。何分間位ねむっていたものかもわからない。一度に眠気がフツ飛んだ。仕方ない。安全第一で行こう。高度五〇〇メートルと決めた。ガソリンを節約しながらエンジンをだましますかして、いつもの倍位の時間をかけて、漸く上昇した。ねむ気はさめたが、今度は猛烈な寒さを感じ出した。南方とはいえ。五〇〇メートル上空は零度の寒さである。着ているものは熱帯用の飛行服とアンダーシャツ一枚そして救命胴衣をまとっているだけ、次第に体が冷えきってきた。一難去つてまた一難だが、眠るよりこの方がましだ。

もうそろそろ宮古島の時間だと思ふ。

だが一向にそれらしいものが見えてこない。さきほどから一人相撲や自爆しかけたりで、相当道草をくついている。それにしてももう島が見える筈だ。宮古島を外せば台湾をつかむのもおぼつかない。じりじりするうち、遙か南方海面に稍々黒ずんだ海域が望見された。さては宮古島？でも随分遠いようだし、雲の影のようにも見えない。思い切つて変針して確認しよ

うか、いや待て、もし島でなかつたら、残り少ない燃料となつて心はいよいよ動揺するだろう。ともすればふらつきがちな心に強く断を下して、そのまま直進することにした。果たして一〇分後に宮古島の上空に出てひとまず安堵した。島は灯火管制をして眠つたように静まりかえっている。私の爆音は米軍機の通過と思われていたかもしれない。ここから針路を真西に向けた。やがて帰還航程も半ばに達する。生還の望みが少しは持てるようになった。先程からの寒さで身体がガタガタふるえ出してとまらなくなった。おまけに涙と鼻水がとめどなく流れ出して、始末におえぬ。

安全第一主義もとうとう我を折り一〇〇メートルだけ値切ることにして、四〇〇メートルで妥協したら少しは楽になった。いいかげんなものだ。我ながらおかしくなつた。

第二目標は石垣島である。ここは飛行場はあるし、対空無線が待機している筈である。はじめてレシーバーと真剣に取り組んだ。呼び出しをかけた、こごえる指先でダイヤルを回す。あれこれ操作するが、雑音ばかりで一向に反応がない。これ以上の努力は。消耗して今の体力ではとても続かぬ。とに角対話を諦めた。またうとうととやりはじめる。機体が首

を振り出しては、はつとして立直すこと

数度。寒さと睡眠の両方が心身をさいなむ。我慢ならぬ苦しさ。先刻別れたばかりの紅顔の隊員達がチラリと目に浮かんでは消えた。何の刺戟もおこらない。いよいよ私の意識も限界に近づいた。何かすることはないか。そうだ。夜食を積んでいれることをすっかり忘れていた。少しも食欲はないが、私の腹は空になっているにちがいない。操縦桿を股にはさんで弁当を取りだした。のり巻きがつまってる。開いただけでもういやになった。それでも無理に冷え切った一つをほうばって、お茶で漸く胃袋に流しこんだ。残りをつと見つめていたが急に癪にさわって機体外にほうりだしてしまった。

遙か前方に石垣島が見えた。これで帰還行程の半ばは過ぎたことになる。ほつとすると同時にこれから一時間半をどうして持ちこたえるか、急に自信を失いかけた。ここで着陸すれば残りの苦痛はなくなる。安易な誘惑が頭を抬げた。正確な判断力を半ば喪失しかけた現在、全然未知の飛行場にしかも暗夜着陸を強行することの如何に無謀な冒険であるかを、いまだ私はわきまえていた。

されば胴体着陸、いや落下傘降下という手もある。だが今更機体を捨てるには忍びない。そんな勇氣も湧いてこなかつ

た。

とに角上空から飛行場を詳細に観察しよう。そして自信があれば着陸敢行と決めた。いよいよ石垣島の灯が接近して来た。ぐつと高度を落して進入したが、暗夜のことである。島の状況がさっぱりつかめない。私は翼燈をつけ前照燈を照らして大きく機体を左右に振って友軍機たことこの合図をしながら島の上空に達した。飛行場ではすぐにも限界燈や着陸燈を点じてくれるものと期待した。高度五〇〇メートルで島の上空を旋回し始めたが地上からは一向に反応を示さない。第一どこが飛行場かさっぱり判らぬ。二回、三回、と旋回を続けたが、島は眠ったように静かである。米軍機と勘違いしているのだろうか。盛んに前照燈を点滅してみせるがやはり駄目だ。今宵沖繩から帰還の友軍機がここを通過することを、島の連中は予め連絡を受けている筈なのに。だがことここにいたってはいたしかたない。時間にして一〇分近くを消費した。着陸断念。落胆したり憤慨したり何とも言えぬ気持ちでこの島を去ることにした私は、再び機首を西に高度を上げて飛びつづけなければならなかった。いつまでこの孤独は続くのか。もう高度三〇〇メートル以上に上昇する気にはなれなかつた。又々貴重な一〇分を失ってガ

ソリンが惜しまれてならぬ。それでも計器の針はどうやら花蓮港迄帰れそうな残量を示してくれていた。

何の予告もなく計器盤の照明燈がフツと消えた。いやな予感に襲われる。電気系統の断線である。エンジンは回転しているところをみると座席関係の故障らしい移動懐中電燈をさぐり出して、スイッチを入れてみるが駄目だ。唯一の頼りになる計器が見えなくなるとは致命的だ。然し有難いことには計器の目盛には蛍光塗料が塗つてあつた。それにしても泣き面に蜂である。

やがて航空図通り与那国島が見えたが、機はその北端の沖合をかすめて行く。大分南風が強くなつて北方へ流されているらしい。針路を稍々南に修正する。与那国はその小さな楕円形を海上にくつきりと現わしていた。昼間なら台湾の山なみが見え始めるのである。九分通り生還の見通しがついたと思つた。

時計を見ても暗くて時間が判らない。やがて夜も10時をまわる頃だろう。離陸以来六時間、この位の飛行は何ともなかつた筈の私も今日だけは徹底してこたえた。台湾が近づくにつれて天候悪化のきざしが見え始めた。今迄満天の星であつたのに前方が消えはじめ水平線が判らなくなり機体の姿勢維持が困難となつて来た。

開戦当初、加藤隼戦闘隊の幾多歴戦の勇士達が長距離攻撃の帰途夜間海上の悪天候のために錯覚に陥って機位を失い、あたかも印沖の海上に没した戦訓があるだけに、天候の悪化は今の私にとっては命取りであった。次第に雲は厚さを増して拡がってきた。雲下を飛ぶ以外にない。雲中に入れば台湾の山に激突する。高度を三〇〇メートルに下げて漸く雲下に這いこんだが、もう真つ暗である。何も識別出来ぬ、計器さえ明るく見えるなら計器飛行も出来るが、今はそれさえ不可能だ。役に立たぬと思いつつも前照燈を点じた。五〇メートル先も見えない。機体は不安定な飛行となつて、酔っぱらつたような足取りを始めた。操縦桿を握る手が硬直して来た。

もう台湾の筈だ。いつ山肌が飛び出してくるか判らない。雨粒が風防に当たり出したのは山際に近づいている証拠だ。目前に山が現れた瞬間急旋回して間に合つかどうか？体が熱くなつて額から汗が流れた。これが最後の試練だと心を励まして操縦桿を握る。少々雲が薄くなつたのか、前方の視度がきき出した。これより悪くならないでくれ。突然目に映じた山肌！左へ垂直旋回。

助かった。見覚えのあるあの断崖、と

うとう台湾に辿りついた。天候は悪くてもこの海岸線は我々の銀座だ。ぼんやり見える波打際に沿つて、一路南下する。断崖が終わるころになつて、夜目にも白くスクールが迫つて来た。終点間近になつても迂回する気にはなれぬ。超低空で突入した。大粒の雨がバンバンと風防に当たつてくだける。花蓮港のそばまで来て四苦八苦の態である。五分でこれを突破する。

なつかしい花蓮平野。皮肉にも、幸運にも花蓮港上空は晴れである。飛行場の赤い限界燈がずらりとならんで私の着陸を待っていてくれていたのではないか。スペリー式着陸燈は上空を照射して私を誘導している。感激に目がうるんだ。

「在天の英霊よ。私は今還つて来た。君達の勇敢な行動と功績を語り伝えることが出来るのだ。願わくば安らかに眠れ」翼燈と前照燈を点じ、機体を大きく振つて帰還の合図をしながら滑走路の真上を突つ切つた。下では人影が右往左往している。場周経路をゆるやかに旋回しつつ着陸準備、車輪を出す。脚が完全に出たかどうかは見えないので、座席の青ランプと、翼の上から出る一〇センチ位の指し棒で確認する仕組になつている。先刻よりランプは故障、棒を見ればこれも全

然出ていないーおや脚の故障かー

もう一度引っこめて車輪出しの操作をする。ーやはりいけない。敵弾にやられたらしいー事故記号の合図をして戦闘指揮所の前を超低空でふつ飛んだ。地上から車輪の状況を確認してもらつたためである。然し地上からは何の信号も送つてくれない。拝むような気持でもう一度超低空をやつた。相変わらずこちらの意図が判らぬらしい。このままでは着陸と同時に機体はこわれるが、燃料を考えると三度繰り返す気にはなれない。

折角ここまで無疵で帰つて来たのに、自分の基地で飛行機を破損させるのか、情けないことになつた。仕方がない。強行着陸あるのみ。

タンクは空だから火災の心配はあるまい。着陸経路に進入した。

フラップを下げ、プロペラの回転をぐつとおとす。機体は着陸誘導燈に沿つて、照明された滑走路に近づいた。ー地上一〇メートルー青草が矢の様に流れる。火災予防のためスイッチを切つた。爆音はハタと止んでプロペラはゆるやかに空転している。スペリー照明機が流れるように後方に去つた。地上三メートルー失速直前である。スーと機体が沈むー。

操縦桿を一杯に引いた。ー不安と期待

の一瞬—ゴロゴロという音が機体に伝わった。おや、別にショックもなければ、プロペラも曲らない。走り続けている。なんだ車輪は出ていたのか。最後迄気をもませる。ああ、とうとう着陸した。一度に全身の力が抜けて気が遠くなり、機体が止まる前にガックリうつ伏せになってしまった。始動車に乗って馳せつけた機付班長が停止したばかりの飛行機の翼に飛び上がって風防を開くや否やものも言わずに私の首にしがみついた。やっと思識を取り戻した。私が最初に発した言葉は「脚、脚」であった。機付長はげんな顔をしている。「脚だよ」私は翼の下を指した。

「ああ、この機の指示棒ははじめからこわれているですよ」こともなげに言った。—こん畜生、こっちの身にもなってみろ—

ピスト前まで地上滑走、機付がかけ上がったて来て、私の装備を外してくれた。よろめくように地上に降り立った私を、同僚のNが走り寄って来てしつかりと抱擁した。今日出撃の際五人並んだ位置に、私は唯一人直立して部隊長に對した。

「坂本編隊攻撃終り。特攻機は全機沖繩上空に進攻せるも熾烈な対空砲火のため二機撃墜さる。他の二機は19時35分米艦

船群に突入。中型艦二隻に夫々命中、日没と砲火のため遺憾ながら、戦果確認し得ず」「御苦労じゃった。貴様の無線は沖繩上空から受信できた。ゆっくり休養せい—

部隊長の言葉も淡々としていた。だが相對する二人の心に、ひそむ共通する思いは、帰らぬ若桜への愛惜の念であったろう。

報告が終わるや否や対空無線班長が馳せつけてきた。「聞こえましたよ。然も沖繩上空からキャッチしました。素晴らしい空中状態でした—

時折発信した私のモールスが次第に感度が強くなるにつれ、欣喜したという。あのオンボロ無線機は、レコードだったらしい。

まだ私は休むどころではなかった。一同に抱き上げられるようにトラックに乗せられる。花蓮港の街を走り抜けて、通信隊に送られた。台北の軍司令部へ直通電話である。今日見送りに来た參謀が、電話に出た。天候、敵情、進行状況、戦闘経過等々、情容赦もなく、三〇分以上に亙る質問攻めである。それでも參謀に對してはまだファイトを持っていた。頑張り通して、ありのままに報告した。戦果確認の件に關しては叱りもしなかった

が、報告が終わって、御苦労ともいつてくれなかった。

なつかしい宿舎に戻った。やれやれ解放されたと思つたのも束の間、私のニュースを聞いた、隣の飛行場に展開している三式戦闘機の部隊長が、深夜にも拘わらず、特攻隊員十数名を引き連れて、待ちかまえていた。私の戦訓を聞くためである。紅顔の隊員達に囲まれた私は、先程突入したばかりの四人の顔が思い出され、途切れがちな言葉に、聞き入る彼等の真剣なまなざしが、喰い入るように、私の視線とぶつかりあった。

命令一下、明日にでも突入せねばならぬ彼等は、如何なる思いで、還つたばかりの私を眺めたことだろう。

トマトジュース一杯で、一時間に亙る座談会をつとめねばならなかった。どうして寝台にもぐりこんだかおぼえていない

翌日。タブロイド判の台湾新聞に目を通して、驚いた。

私の戦果が大きく報道されている。「軍司令部発表。中型艦二隻撃沈—」の見出しである。私はかきむしられる思いで、參謀の作つた“撃沈”の記事を静かに、四人の遺品の前に捧げた。

連載山ある記20

新潟県「八海山」

会員 池田 康博

酒の銘柄でも知られる「八海山」に登った。と言っても九合目の「千本檜小屋」をゴールとした。そこから先は、ギザギザの岩場で、“山歩き”のレベルを超えた難コースとなっているからである。

八海山ロープウェイで登山届を提出した後、8時40分発で出発、千百四十七mの山頂駅から八海山大神の赤い鳥居をくぐって階段を登り、8時51分に遥拝堂避難小屋に出た。ここは4か所ある登山道の大崎口のコース上にあり、もう少しで四合目という地点である。ここからしばらくは木道を登り降りしながら進んで行くが、五合目も過ぎて六合目が近くなると梯子の箇所も連続するなど、徐々に傾斜がきつくなっていった。そして9時50分に六合目の女人堂に到着した。

今は避難小屋がある女人堂の広場に歩いて目に入ったのは、谷を隔てた先に薬師岳が壁のように屹立している姿だった。また、広場の一隅には薬師岳を背にして八海山大神の石碑が立っている。女人禁制であった江戸時代には、女性はこちらから遥拝していたそうだ。ここで大休止をとって9時58分に出発、一旦下って薬師岳に取り付く。

見たとおりの急登をしばらく登ると、

「祓川（はらいがわ）」という小さな沢を渡った。ひと跨ぎの沢だが、いかにも霊山に踏み入る思いがする。そして、息遣いも荒く登っていると、「急な登りも中間点、登りきると薬師岳山頂（八合目）」という親切な立札に、あと半分かと力を得。長い鎖場に差し掛かった時には、「急な登りもあと少し、登りきると薬師岳山頂（八合目）」という立札に元気を貰って10時45分、山頂に辿り着いた。

薬師岳は標高千六百五十三m、山頂には「太郎坊大神」と「正勝吾勝勝速日天之忍穂月命」連名の石碑や「猿田彦」の石像などが祀ってある。これらに拝礼した後、平坦な山頂部を少し進むと、八ツ峰と言われる岩峰群のうち、最初の地蔵岳と、その巨大な岩塊の下に、控えるように建っている千本檜小屋が見えてきた。まるで一幅の絵のような美しい景色である。

さて、いよいよ九合目、ゴールとなるが、ここも一旦下ってから登り返して小屋に到着、時刻は10時55分、ここまでの所要時間は2時間15分であった。小屋の標高は千六百五十m、因みに、地蔵岳は千七百七m、八つ目の大日岳が千七百二十m、最高峰は入道岳の千七百七十八mである。

小屋がゴールではあったが、少し先に進んで、地蔵岳に至る岩場を覗いた後、

小屋に戻る途中の登山道脇で昼食にした。食事中にも、ヘルメットを着けたオバサン一行、長野の山は歩き慣れているからと言う二人連れ、リュックを置いて難コースに挑むオジサングループが通っていた。

この日は、曇り空で、帰りは小雨となった。それでも日本海側を眺めれば、雲海から頭を出して島のように見える峰々、尾根を越える雲の滝、魚沼側では大地に広がる黄金色の美しい稲田などが堪能できた。また、紅葉も山頂部で始まっていた。薬師岳山頂では祈祷する行者の姿もあった。

雨衣を着たり脱いだりしながら大急ぎで下って、八海山ロープウェイに着いたのは13時43分、すっかり雨であった。



千本檜小屋のバッジと登頂証

海軍航空

顕彰譜 (8) 会報 1 3 4 号から始めた特別攻撃隊全史第二版の顕彰譜の
ご紹介第八回目です。

長野善光寺

神風特別攻撃隊之碑



由来記

昭和19年10月15日、比島に赴任した第一航空艦隊司令長官大西中将が体当り攻撃の特攻戦法の採用を決断し、第一神風特別攻撃隊を編成し、10月21日大和隊が先陣となって出撃以後二、五二五名、一、四〇六機が終戦に到るまで、身を弾丸とし祖国の安泰を願って散華していった。

特攻隊員の崇高な精神、祖国愛、偉大な戦勲を慰霊顕彰するため、長野県神風特別攻撃隊遺族会(会長若麻績栄氏)が、昭和36年4月にこの碑を建立して、碑の趣旨のほか、自刃した大西中将の遺書をこれに嵌めこんである。

さらに昭和38年7月には長野県神風特別攻撃隊員銘碑も建立され、隊碑の右側に併置されている。

所在地 長野県長野市善光寺
建立 昭和36年4月
(銘碑) 38年7月
問合せ先 長野市元善町四九一
善光寺事務局

(〇二六二一三四一三五九二)

海軍航空

白鷗顕彰之碑



白鷗顕彰之碑

学徒出身戦没海軍飛行科予備士官の霊に捧ぐ

大東亜戦争は航空決戦が祖国の存亡を決する戦況となり、旧制大学、高等・専門学校を卒業または在学中の学徒たちは、緊迫した祖国と同胞を護るために敢然と海軍飛行科予備学生・予備生徒を志願し、学窓から大空の決戦場へ赴きました。

短期間の猛訓練に耐え、航空隊指揮官として英知と勇気をもって戦い、2485名が雲ながるる果てに散華されました。そのなかで神風特別攻撃隊士官搭乗員の85%実に658名が学徒出身海軍飛行科予備士官であります。

学徒たちが戦争の矛盾を感じつつも、一心に祖国の安泰と、家族の平安を信じ「後を頼む」の一言を託し生死を超越して戦った精神こそ、この国を継ぐ者への指標であります。こうした痛恨の史実を語り継ぐため、戦後日ならずして生存同期生相集い海軍航空隊を象徴したその名も白鷗遺族会を結成。今日英霊の永遠なる在世を希い「白鷗顕彰之碑」を建立し、深く哀悼の意を捧げ、世界の平和を祈るものであります。

2001年(平成13年)5月27日

白鷗遺族会

所在地 京都府京都市東山区清閑寺霊山町一
 京都霊山護国神社内
 建立 白鷗遺族会
 平成13年5月
 写真提供 白鷗遺族会

海軍特攻

広島県江田島

海軍特別攻撃隊銘牌



建立の由来

広島県江田島旧海軍兵学校は戦後海上自衛隊の第一術科学校、幹部候補生学校に生まれ変わっている。校内にある教育参考館は旧海軍の完備した資料館であり、その二階回廊には明治以来の本校卒業生戦没者の銘牌が大理石板によって整備されてきた。そして大東亜戦争において活躍した特別攻撃隊の名を留めその偉勲を顕彰するため、特例によって下士官・兵を含む全特攻隊の隊名、階級、氏名（連合艦隊布告該当者のみ）の大理石製銘牌が、昭和41年同所に整備され、遺族、関係者、見学者に多大の敬意と感動を喚び起こしている。特攻隊には神風特別攻撃隊、特殊潜航艇、回天特別攻撃隊が含まれている。



所在地

広島県江田島市
海上自衛隊第一術科学校内

建立

昭和41年6月11日
問合せ先 海上自衛隊第一術科学校 広報係

写真提供 海上自衛隊第一術科学校
(〇八三―四二二―二二)

海軍航空

ルソン島マバラカット飛行場跡に建てられた 神風特別攻撃隊の碑



神風特別攻撃隊員から、マスケットとして可愛がられた当時14歳のダニエル・ディソンさんが、長じて第一航空艦隊猪口力平参謀と第二〇一航空隊中島正飛行長共著の「神風特別攻撃隊」(英訳文)を読んで、往時の優しかった隊員が別人の様に厳しい顔付きをして、凛々しく出撃して征ったことを思い出し、同志を募って一九七四年(昭和四十九年)東マバラカット飛行場跡に顕彰碑(左上)を建立した。(第一次碑)

ところが一九九一年のピナツポ火山の大噴火で、3米余の火山灰の下に完全に埋ってしまった。

マバラカット市は復興を計画、二〇〇一年に鳥居と後壁(比国旗と海軍旗が画かれている)、鳥居の向って右に日英両文の説明板が建てられ、更に二〇〇四年(平成十七年)には、鳥居と後壁の間に特攻勇士之像が建立された(左下)。(第二次碑)

ディソンさんは、更に閩大尉以下の敷島隊の最初の出撃日は、十月二十一日でも西マバラカット飛行場(クラーク特区内に在り、当時の状態の仮残されている)からであった、という史実を後世に伝えるべく、同じく二〇〇四年に西飛行場跡に記念碑を建てた(左中)。

慰霊祭は毎年市内リリー・ヒルにおいてマバラカット市主催で敷島隊出撃の十月二十五日〇七二五時に行われている。

因みに敷島隊は二十一日には敵艦隊を発見出来ず、東マバラカット飛行場に帰投、二十三・二十四日と反覆出撃して目的を果さず東マバラカット飛行場に帰投、4度目の二十五日に敵空母撃沈1、大破1、小破2の赫々たる戦果(米軍資料)を挙げた。

海軍

フィリピン・セブ島・セブ航空基地 セブ観音像



セブと特潜（甲標的）

セブ甲標的隊は昭和19年11月からオルモック海で待敵攻撃を実施した。12月以降は攻撃の重点をネグロス島とミンダナオ島の間の海域とし、スリガオ監視所の敵艦船通行情報によりスマゲテ前進基地から出撃することとし、このうち昭和20年3月上旬まで反復出撃、甲標的隊として最大の戦果をあげた。

由来記

セブ航空基地は比島作戦において昭和19年10月20日第一神風特攻隊の大和隊が進出し、米機動部隊に突入していったところであり、これに若桜隊、葉桜隊が続き、大戦果を挙げた。この基地はレイテ作戦間、陸海軍航空部隊の根拠基地、中継基地として重要な役割を果たしたが、昭和20年3月26日米軍の上陸を受け、20日間の死闘のすえ多数が戦死している。

昭和49年厚生省遺骨収集団海軍班が訪島して大量の焼骨を行い、昭和50年に二〇一空会（団長中野忠二郎氏）が慰霊巡拝して約2米の大碑を建立し、次いで5基が増設された。昭和58年になって観光地のこの地にセブ・プラザホテルが建設されるに当って一本にとりまどめることになり、海軍慰霊団によりこの観音像が建立され、特攻隊をはじめ基地全戦没者の冥福を祈っている。

所在地

セブ市ラボック

マルコポーロプラザホテル前

建立 昭和58年5月21日

問合せ先 セブ日本人会会長 松田和人

写真提供 セブ日本人会

海軍特攻

沖繩航空作戦戦没者の碑 空華之塔



向かって右は飛行機第19戦隊の特攻碑。左は南方航空輸送部の慰霊碑

由来記

昭和20年を迎え、大東亜戦争の戦局は敗退と欠亡の危機にあり、戦争指導方針は本土決戦態勢の確立と全軍特攻化対決におかれた。

沖繩作戦が開始されるや、陸海軍航空部隊は練習部隊をも特攻作戦に組込み、九州、台湾、南西諸島の各基地から昼夜を分たず特攻を主力にして米機動部隊、沖繩周辺艦船、沖繩敵飛行場に猛攻をくり返した。

飛行機は新鋭第一線機から練習部隊の旧式実用機、中間練習機、機上練習機（白菊）まで動員され、搭乗員は学鷲から十代の若い予科練や少飛出身者までが突入していった。

その機数は千機を越え、その戦士は二千を越えた。

昭和39年沖繩翼友会（会長渡名喜守定氏）はこれら烈士の英霊鎮魂と砕散した航空機材を祀り、航空界の発展と世界平和を祈念してこの碑を沖繩本島上に建立し、毎年9月20日（空の日）前後に慰霊祭を行っている。

所在地 糸満市摩文仁

建立 昭和39年11月1日

問合せ先 沖繩県西原町字翁長四二七

沖繩翼友会

（〇九八一九四五―六八五四）

海軍特攻



硫黄島にある特攻の碑

中央に建っている碑の碑文の中で第一、第二御楯特別攻撃隊に関する部分は次の通り。

(第一御楯特別攻撃隊)

19年11月27日朝本島を発進して彩雲二機に誘導された零戦12機がサイパン飛行場のB-29に対し白昼銃撃を敢行し、米軍の心胆を寒からしめたが、これ即ち第一御楯特別攻撃隊である。

(第二御楯特別攻撃隊)

米軍は昭和20年2月大挙攻略軍を編成して侵攻し来ったのである。この敵に対し我が方は第二御楯特別攻撃隊が大戦果を挙げ……

第二御楯隊は彗星12機、天山8機、零戦12機より成り、5個の攻撃隊に編成されていた。2月21日香取基地を発ち、八丈島で給油して次々と出撃し、硫黄島周辺の敵艦船群に突入して多大の戦果を挙げた。特攻と記録されているのは川村弘大尉以下35名である。なお前述の第一御楯隊の特攻と記録されているのは大村謙次中尉以下11名である。



第一御楯隊の碑の右側面には『海軍中攻隊』左側面には『陸軍重爆隊』と刻まれている。

これ等の隊は硫黄島で給油してサイパン爆撃に向かった飛行隊であって、特攻隊扱いにはなっていないが、未帰還機が少なくない。

特攻文芸

短歌・俳句・川柳の部



● 引揚者 皆寔れ曳き夜寒道

橋過ぎて母の背に居ぬ無月かな

● 島影や 漁船浮き沈み 木の葉落し

狭霧なか 母貌ひとり水葬式

松花江

● コスモスの 頭をなげる 秋の風

よみびとしらず



● マスク慣れ 素颜出すのが 恥ずかしい

● ダイエット 我慢我慢の 秋が来た

ネコ

事務局からの報告等

一 住所等の変更について

現在、会報は、メール便にて皆様にお届けしています。メール便は、あて先が少し違っただけでも事務局に返送され、お届けすることが出来ません。

実は、毎号、十数通が「宛先不明」で返送されており、郵便局から再度発送の事務を行っております。

転居又は地番等が変わった場合には新しい住所名を、また、同居されるようになった場合は、「〇〇様方」まで必要となりますので、電話やメール、FAXなど、事務局にご連絡下さいますようお願い致します。

二 年会費及び寄付金の税額控除

当顕彰会は公益財団法人として認定されていますので、年会費も税制上は「寄付金」となります。このため、年会費を確定申告する事により税額控除を受けることが出来ます。

確定申告に必要な「寄付金受領証」と「税額控除に係る証明書㊦」が必要な方は遠慮なく事務局へご連絡下さい。

なお、年会費も含めて一万円以上の御寄付をされた方には、ご連絡の有無に係らず十二月月上旬に送付しています。

税額控除についてご不明の方は事務局にお問合せ下さい。

寄付者御芳名(敬称略)

(令和4年7月1日～9月30日)

(単位千円)

一〇〇	吳 奈々子	二〇	遠山 三千代	三	小長谷 丈晴	三	時重 英之
一二	降矢 達男	一二(公財)	海原会	三	大穂 孝子	三	大穂 園井
一〇	南方 弘	一〇	猪瀬 和英	三	尾籠 慎吾	三	館本 勳武
一〇	竹野 好展	一〇	鈴木 敏博	二	辻本 浩司	二	椿 孝則
一〇	齋須 将	一〇	吉野 信二	二	岩崎 茂	二	橋本 亀
一〇	尾中 信仁	一〇	中矢 伸志	二	森山 敏明	二	高橋 芳幸
七	服部 武志	七	粕井 隆	二	酒井 陽太	二	佐藤 三恵
七	今泉 幸男	七(株)	裕生堂	二	柄澤 寛之	二	飯田 美絵
七	川田久四郎	七	福田 文治	二	池田 守	二	佐野 幸利
七	森山 正義	七	橋本 大二郎	二	小林 一朗	二	黒木 修
七	松尾 文誠	七	名和 まどか	二	長本 幹郎	二	長谷川知幸
七	澤 知樹	七	清水 典郎	二	栗原 巖	二	小島 啓三
七	小堀 桂一郎	七	氏家 康宇	二	杉山 蕃	二	衣笠 陽雄
七	天野 弘子	七	神林 千祥	二	大瀧 成紀	二	織田 邦男
七	島野 雅子	七	高井 賢一	二	白井 日出男	二	原田 里津子
七	阿部 敏行	七	中島 尚史	二	舛谷 正雄	二	馬場 しづ子
七	田辺さだ子	七	松川 徹男	二	大田 幸男	二	高倉 弘喜
七	中村 真	七	加藤 千佳	二	天野 文恵	二	吉田 日光
六	堂坂 清	五	吉田 三郎	二	戸祭 千恵子	二	松本 敏夫
五	田中 襲	五	臼田 智子	二	山中 進	二	石井 敏子
五(株)	エアースタジオ	五	伊藤 元夫	二	竹本 佳徳	二	江守 聖学
五	林 佐吉	五	川尻 孝紀	二	間山 聡	二	安藤 佐智子
五	前田 俊郎	一	宇都宮 秀全	一	小山 哲	一	村山 公一
							武藤 一彦

一	川口 卓男	一	佐多 和仁
一	青木 義博	一	渡辺 由佳
一	渡辺 里佳	一	古川 淳一
一	福島 隆夫		

新入会員名簿(敬称略)

(令和4年7月1日～9月30日)

北海道 谷口 圭介

久住 浩文

(有) イチカワ北海食品

埼玉 石井 健二

千葉 伊藤 國重

東京 広田 正勝

福田 ジロー

山下 博

神奈川 小林 千夏

大阪 小林 一朗

高知 高知県議会一燈立志の会

会員訃報(敬称略)

北海道 野俣 明

武田 司 (4・2・12)

千葉 後藤 英夫 (2・11・1)

木下 矩武 (4・6・25)

鈴木 好次 (4)

東京 小林 彦重 (3・12・6)

小松原 公夫 (4・5)

池田 壽々子 (4・5・17)

長野 小泉 洋平

京都 小川 泰俊

鹿児島 吉峯 良一 (4・5・7)

今村 齊 (4・6・29)

「冥福をお祈りします。」

会員ご入会のご案内

「特攻隊戦没者に感謝と敬意を」

当顕彰会は、先の大戦の末期、一つしかない命を、祖国の安泰と家族や大切な人のために捧げられた特攻隊員に対し「あなた達のこととは忘れません。有難うございます。感謝します。私たちも努力します。どうぞ安らかに！」を胸に、慰霊・顕彰を行う団体です。これにご賛同して頂ける方ならどなたでも会員にお迎えいたします。多くの皆様のご入会をお待ちしております。

- 当顕彰会の主な事業
- ・特攻隊戦没者の慰霊顕彰(他団体への参加を含む)
- ・会報の発行等による特攻及び戦没者の伝承等
- ・特攻に関する資料の収集、調査、図書等の貸出講演会等の開催その他

- 年会費
- ・一般会員 3000円
- ・学生会員 1000円
- URL: <https://tokkotai.or.jp>
- QRコード



ご投稿についてのご案内

ご投稿に際しては、次の点にご留意くださるようお願い致します。

- 1 原稿は、手書き、ワープロ、パソコン作成のいずれでも結構です。可能ならば、ワードファイル、又はテキストファイルで頂ければ幸いです。PDFファイルは編集の都合上、お受けできません。
- 2 記事の取捨選択、紙面の都合等による一部割愛、修文等については、当顕彰会にお任せ願います。
- 3 投稿記事に関する写真がありましたら、なるべく添付して下さい。
- 4 原稿、写真等は、原則としてお返し致しません。必要な場合はその旨お書き添え下さい。
- 5 会員以外の方の投稿も歓迎致します。
- 6 投稿記事等の送付先は、左記宛てとして下さい。

〒102-0072
 東京都千代田区飯田橋一丁目5-7
 東専堂ビル2階
 公益財団法人 特攻隊戦没者慰霊顕彰会
 電話 03-5213-4594
 FAX 03-5213-4596
 E-mail jimukyoku@tokkotai.or.jp